

西 岩 野

—新潟県柏崎市長崎西岩野遺跡発掘調査報告—

1987

柏崎市教育委員会

西 岩 野

—新潟県柏崎市長崎西岩野遺跡発掘調査報告—

1987

柏崎市教育委員会

裡 脊 西

——新嘉坡本地所產的蜜蠟，有此種顏色者，一

序

西岩野遺跡は、柏崎市の中心部から北東に5km程離れた長崎地内の砂丘地に所在する。この遺跡は、昭和49年に発掘調査された岩野遺跡とも深い係わりがあり、昭和58年の調査により発見されました。

この報告書は、この度の一般県道荒浜安田線道路改良工事の実施にあたり、当市教育委員会が県土木部より委託され発掘調査した記録であります。

発掘調査は昭和61年6月～7月に実施、梅雨期にもかかわらず比較的天候に恵まれ、順調に進めることができました。

縄文時代から近世まで各時代にわたって検出された遺構、遺物はみるべきものが多くあり、縄文の土器片、弥生の大型溝と住居址、中世の溝状遺構・土壙墓・櫛址・六文銭、近世の旧道路址・建物址・堅穴状遺構等、当時の生活様式を知る数多くの手懸りを得ることができました。

これらの成果を報告する本書が、研究者のみならず、広く一般の人々に活用され、埋蔵文化財に対する理解が一段と深められるよう願っております。

なお、この発掘調査に当って、多大な御協力、御援助を賜った県教育委員会、また、計画から調査、実施に至るまで格別の御配慮をくださった県土木部管理課、柏崎土木事務所の各位、それから調査に参加された調査員や地元の方々に対し、深甚な謝意を表します。

昭和62年3月

柏崎市教育委員会

教育長 山田恒義

例　　言

- 1 本報告書は、新潟県柏崎市大字長崎字岩野地内（通称西岩野）に所在する西岩野遺跡の発掘調査記録である。発掘調査は、一般県道荒浜安田線道路改良事業に伴い、柏崎市が昭和61年度に新潟県から委託を受け、柏崎市教育委員会が調査主体となって実施したものである。
- 2 発掘調査現場作業は、昭和61年6月から同年7月まで実施し、整理・報告作業は同年9月から昭和62年3月まで行った。発掘調査経費は、事業主体である新潟県が負担した。
- 3 発掘調査現場作業は、地元長崎、長崎新田両地区の有志から協力を頂いた。整理・報告作業は、柏崎市西本町3丁目喬柏園内遺跡調査室において、調査担当品田高志を中心に行った。
- 4 発掘調査に伴う出土遺物の注記は、「西岩野」からNINとし、グリッド名、層位及び遺構名を併記した。
- 5 出土遺物は、一括して柏崎市教育委員会が保存・管理している。
- 6 遺構・遺物の実測・写真撮影及び挿図の作成は、整理員の協力を得て品田が行い、報告書の執筆及び編集も併せて品田が行った。
- 7 発掘調査から報告書作成に至るまで、下記の諸機関等から御指導及び御助言を賜った。記して厚く御礼を申し上げる。

川又昌延、駒形敏郎、坂井秀弥、田中靖、遠山利保（長崎区長）、小熊博史、三井田忠明、
箕輪一博

新潟県教育庁文化行政課、新潟県土木部管理課、柏崎土木事務所、柏崎市史編さん室、
柏崎市立図書館

調　　査　　体　　制

調査主体 柏崎市教育委員会（教育長 山田恒義）

総括 仲野 新一（社会教育課長）

管理 石井 良男（同 課長補佐）

崎 昭一（同 調査事）

花井 恵雄（同 社会教育係長）

庶務 阿部せつ子（同 庶務係主査）

調査担当 品田 高志（同 社会教育係学芸員）

調査員 阿部 正昭

発掘作業 桜井友三郎、末崎助治、本間隆太郎、本間久雄、高野存朗、
柄堀キサ、本間チヨノ、元井秀子、末崎ミチ、松田ヨシイ、
石黒美喜子

整理作業 舛刈敏子、大野博子、石黒美喜子、赤沢フミ、中村郁子、庭山保子

目 次

I 序 説	1
1 既往の調査	
2 調査に至る経緯	
3 発掘調査の経過	
II 環 境	4
1 自然的・地理的環境	
2 歴史的環境	
III 遺 跡 概 観	10
1 遺跡の概略	
2 調査区の設定	
3 層 序	
IV 遺 構	15
1 遺構の分布と概略	
2 弥生時代	
1) 住居址 2) 土坑 3) 大溝 4) ピット群	
3 中世	
1) 溝遺構 2) 墓址 3) 土塙墓 4) ピット群	
4 近世	
V 遺 物	28
1 土器類	
1) 弥生土器 2) 繩文土器 3) 中世の土器類 4) 近世の陶磁器類	
2 石器類	
3 土 製 品	
4 古 銭	
VI 総 括	44
1 柏崎平野における弥生時代後期	
2 西岩野遺跡出土後期弥生土器群について	
引用参考文献	

図版目次

- 図版1 遺跡 1. 岩野遺跡・西岩野遺跡遠景 2. 西岩野遺跡近景
図版2 遺跡 1. 西岩野遺跡(調査前) 2. 西岩野遺跡表砂除去
図版3 調査 1. S D - 57大溝発掘 2. 中世溝群発掘 3. S X - 2堅穴状遺構発掘
図版4 弥生時代 1. 第IIIb層上面ピット群 2. S I - 60住居址 3. 遺構群全景
図版5 弥生時代 1. S K - 3土坑 2. S X - 50土坑状遺構 3. S I - 60, P₁柱穴
図版6 弥生時代 S D - 57大溝 1. 調査区西壁 2. C断面 3. D断面
図版7 弥生時代 S D - 57大溝 1. 調査区東壁 2. 大溝全景
図版8 中世 1. 遺構群全景 2. 遺構群全景
図版9 中世 1. S D - 53溝 2. S D - 52溝 3. S D - 52溝断面
図版10 中世 1. S D - 54溝 2. S D - 55溝西端 3. S D - 55溝中央
図版11 中世 1. 土壙群 2. S K - 51土壙 3. S K - 56土壙
図版12 近世 1. 遺構群全景 2. S B - 1建物址
図版13 近世 1. S X - 2堅穴状遺構 2. S R - 62道路状遺構
図版14 弥生土器 図版17 弥生土器、土製品、石器類
図版15 弥生土器 図版18 繩文土器、珠洲系陶器、古銭
図版16 弥生土器 国版19 陶磁器(唐津)
国版20 陶磁器(伊万里、越中瀬戸)

挿図目次

- 第1図 柏崎平野地形分類図.....5
第2図 遺跡の位置と周辺の遺跡.....8
第3図 岩野台地の遺跡と散地形.....11
第4図 遺跡の現況と調査区.....12
第5図 基本層序断面図.....13
第6図 遺構全体図.....16
第7図 弥生時代の遺構群.....17
第8図 S I - 60住居址断面図.....18
第9図 S X - 50土坑状遺構.....19
第10図 S X - 50土坑状遺構出土遺物.....20
第11図 S D - 57大溝断面図.....22
第12図 中世の遺構群.....折込み
第13図 中世の遺構群断面図.....23
第14図 中世土壙群.....25
第15図 近世の遺構群.....27
第16図 弥生土器器形分類一覧.....29
第17図 弥生土器(1).....31
第18図 弥生土器(2).....33
第19図 弥生土器(3).....35
第20図 弥生土器(4).....37
第21図 繩文土器及び中世土器類.....39
第22図 石器類(1).....41
第23図 石器類(2).....42
第24図 土製品.....43
第25図 古銭.....43
第26図 柏崎平野における後期弥生土器.....47

I 序 説

1 既往の調査

西岩野遺跡発見の端緒は、東側に隣接する岩野遺跡にあると言えるだろう。現在の両遺跡は、国鉄越後線によって東西に分断されているものの、本来は同一台地に占地していたものであった。しかし、当初遺跡として確認されたのは岩野遺跡であり、永らく西岩野遺跡は無視されたも同然という状況にあった。この理由としては、西岩野の一帯が荒浜砂丘東辺に接し砂丘砂によって覆われていたことがあげられる。これに対し、東岩野では砂丘砂の影響をほとんど受けず、明治初年頃には開墾されていたという。この耕作等に伴い多くの土器片や石器類が出土し、地元の長崎、土合両地区を中心に遺跡の存在が暗に知られていたものとおもわれる。

岩野遺跡の周知化が行われたのは、昭和47年度に実施された柏崎市教育委員会による遺跡分布調査であった。しかし、範囲とされたのは、台地東端付近の東西約80m、南北約150mの極一部（約10,000m²）にとどまり、北辺では更に西側へ遺物散布地が広がるもの、特に重要視されていなかった。

この分布調査当時、岩野遺跡の位置する東岩野では、ゴルフ場建設の計画があったようであるが、結局中途で消滅したらしい。しかし、昭和49年にはあらたに18,000m²に及ぶ宅地造成が計画され許可される事態となった。市教委等は、周知の遺跡であるとして、事前に発掘調査を必要とする内容の申し入れを行うとともに、長岡市立科学博物館の中村孝三郎氏（当時）に依頼してボーリング調査が実施された。その結果、岩野遺跡の重要性と、部分発掘の危険性を強調されたのであった（中村 1974）。昭和49年夏、調査範囲は決して広くはないが、発掘調査が実施された。この発掘調査は、当市においては2度目の本格的な発掘調査であり、検出された住居址や多くの縄文土器が出土したことは、埋蔵文化財に対する一般の関心と大いに高めるものであった。

昭和55年、この発掘調査の成果が報告書（関ほか 1980）にまとめられたが、その位置図によると、現在の西岩野も岩野遺跡の範囲内に包括されたものとなっている。しかし、それ以外に記述もなく、西岩野まで遺物散布が及ぶことが確認されるのは、昭和58年度に実施された新潟県教育委員会による遺跡詳細分布調査まで待たねばならなかった。

2 調査に至る経緯

昭和58年、県教委による遺跡詳細分布調査が実施され、西岩野にも遺物が散布していることが確認された。西岩野遺跡は周知化されることとなつたが、しかし範囲や時期については明確にされたとは言えなかつた。この時、既に一般地方道荒浜安田線改良工事が着工しており、工事の一部が遺跡部分にかかっているとともに、遺跡北辺に法線が設定されていた。県教委は、

昭和58年9月に新潟県土木部に対し、遺跡が発見された旨、通知を行った。昭和59年2月、柏崎土木事務所は、市教委に対し、事業計画を通知し、両者による遺跡取扱い協議が開始された。その結果、昭和60年度試掘確認調査、昭和61年度発掘調査という埋蔵文化財包蔵地に対する事業計画の大枠が設定された。

昭和60年9月18日、現地にて関係二者による協議を行い、工事範囲及びその概要について説明を受け、同月26日から10月3日にかけて、試掘確認調査を実施した。調査は、延べ約30,000m²を対象とし、A地区（西岩野遺跡斜面部）、B地区（同平坦部）、C地区（岩野遺跡西側斜面部）の3地区に区分して実施した。遺跡は、表層を0.6～1.5m以上の砂丘砂に覆われ、更に更新世の地山まで1.5m前後と深く、また小人形による調査であったため、合計5カ所の試掘坑を完掘したにとどまった。試掘坑5カ所のうち、4カ所は平坦部であるB地区に集中させ、残り1カ所をA地区に、C地区は現況観察のみにとどめた。A地区は、北向の斜面で、砂丘砂が厚く堆積し、小規模な試掘では無理なためであった。またC地区は、現状が山林で、比較的急な斜面であったことによる。遺物が比較的まとまって出土したのは、TP-1試掘坑のみで、弥生時代後期の土器類を中心とした。また遺構の可能性がある落込みも認められた。

昭和60年11月、試掘確認調査の概要をまとめて柏崎土木に送付し、調査に基づく遺跡取扱い協議を行った。その結果、A地区とC地区は立合調査、B地区約1,000m²を発掘調査とすることで合意した。11月末に柏崎土木から文化財保護法第57条の3の規定に基づく事業計画が提出され、12月意見書を添付して進呈した。発掘調査は、当初昭和61年4月下旬には開始することで合意していたが、県土木側の事情により結局6月に着手することとなった。5月、文化財保護法第98条の2の規定に基づく発掘調査の届出書を提出し、作業員の確保等、発掘調査の準備にはいった。

3 発掘調査の経過

発掘調査は、昭和61年6月3日から同年7月23日まで、延38日間にわたって実施し、発掘面積は延約800m²となった。

6月3日、2台の重機により調査区全体を覆う新規砂丘砂の除去作業を開始する。砂丘砂は平均約60cm、厚いところでは2m以上にも達し、斜面部では予想以上であった。これら除去作業と併行し、現場プレハブやトイレを設営し、器材の搬入等を行った。更に表土剥ぎ後杭打ちを行い、グリッドを設定し、7日には発掘調査の準備が一応整った。

6月9日、本日から地元の長崎、長崎新田両地区的作業員が参加する。ちょうど梅雨入りが宣言された。全体打合せ後、テントを張り、ベルトコンベヤーを設営した。発掘作業は、調査区西側北向斜面の表土除去を始めたが意外に深く、調査期間の制約から10日午後には、東側平坦部の表土除去に移行した。東半部の表土作業は、12日には概ね終了し、E-3Gから直ちに表砂直下の遺構確認を開始した。表砂は、古くとも近世以降であることから、遺構等はあまり期待していないなかったが、砂丘砂を覆土とする小溝や小ビットが多く検出されはじめた。13日には、

E-4Gまでそれらピット群が分布することが確認され、更に南側には堅穴状の遺構（S X-2）も検出された。結局小溝や小ピット群は、建物址の一部であることが判明（S B-1）した。これら第Ic層上面に検出された遺構調査は意外に難行し、時間がかかるため、16日からD-E-5Gの第II層発掘に着手した。第II層は試掘調査ではほとんど遺物が出土しない層であったが、若干の中世陶質土器等が出土し、稀薄ではあるが中世の包含層であることが判明した。E-5G付近は、第II層が比較的薄く、第IIIa層が露出して弥生時代後期の土器が出土はじめた。18日には、第IIIb層上面がほぼ検出されたため、順次遺構確認を行う。19日、第II層の発掘をD-4G及びE-4G西側に拡張する。第II層は北に行くほど薄くなり、すぐに第IIIb層や第V層が露出した。遺物の出土は極めて少なかった。20日、E-3~4Gに検出されていた第Ic層上面の遺構調査が漸く終了した。23日、E-2~3Gの第Ic層を発掘したが、直下には第V層が露出し、遺物は近世以降の陶磁器類が断片的に出土するのみであった。ただし、若干硬化した粘質砂層部が東から西へ直線に延びているのが確認され、近世以降の道路址であると考えられた。26日、降雨によりぬかるむため、調査を北向斜面部に変更し、第V層地山面検出作業を行った。その結果、E-D-3Gから溝状遺構が検出され、中世陶質土器が少量伴っていた。28日、E-4Gの第IIIb層検出作業を行なながら、D-E-5Gの遺構確認を行う。しかし、平面形を明確にできず、30日にサブトレンチによって確認したところ、第IIIb層の下層に黒褐色土層が存在し、それが露出していたことが判明した。E-5G第IIIb層上面に確認されていたピット等については、7月1日全てを完掘した。2日、C-3Gからも中世の溝状遺構が検出され、一部発掘を開始し、4日に概ね完掘した。3日には、D-E-4~5Gから弥生時代後期の土器群が集中的に出土はじめ、炭化物を多く包含する遺構（S X-50）が第IIIb層中で確認された。また、E-5⑧⑨Gからは土器が多量に出土した。7日、E-4、5Gの第V層上面（地山面）の検出作業を行い、かなり規模の大きい溝（SD-57）を確認した。環濠の可能性もあり、遺物も大量に出土するのではないかと期待された。このSD-57大溝北側には、小さな焼土塊2カ所とピット（柱穴？）が幾つか検出され、住居址（S I-60）の可能性がもたらされた。またこの日、E-3Gから検出された道路状遺構の調査に着手、9日に図面も終了した。SD-57大溝は、幅4m前後、深度も確認面から1.5mはあり、完掘にはかなりの時間が必要となつた。8日には発掘に着手したが、9日は強い雨によって難行し、結局完掘は11日となった。12日、E-1~2Gからも検出された中世溝状遺構も部分発掘ではあるが一応完掘した。また、E-4GのS I-60住居址についても発掘を急いだが、炉址と主柱穴2基を確認し得たものの、他は不明確で、平面形も明確にできなかつた。14日、予定された発掘作業を全て終了した。

7月15日から、遺構平面図及び断面図や完掘地形測量等を行い、18日には全てを終了し、器材の撤収作業等を行つた。

7月21日、重機により現場の埋戻し作業を始め、23日、これも終了し、発掘調査現場作業の全てを完了した。

II 環 境

1 自然的・地理的環境

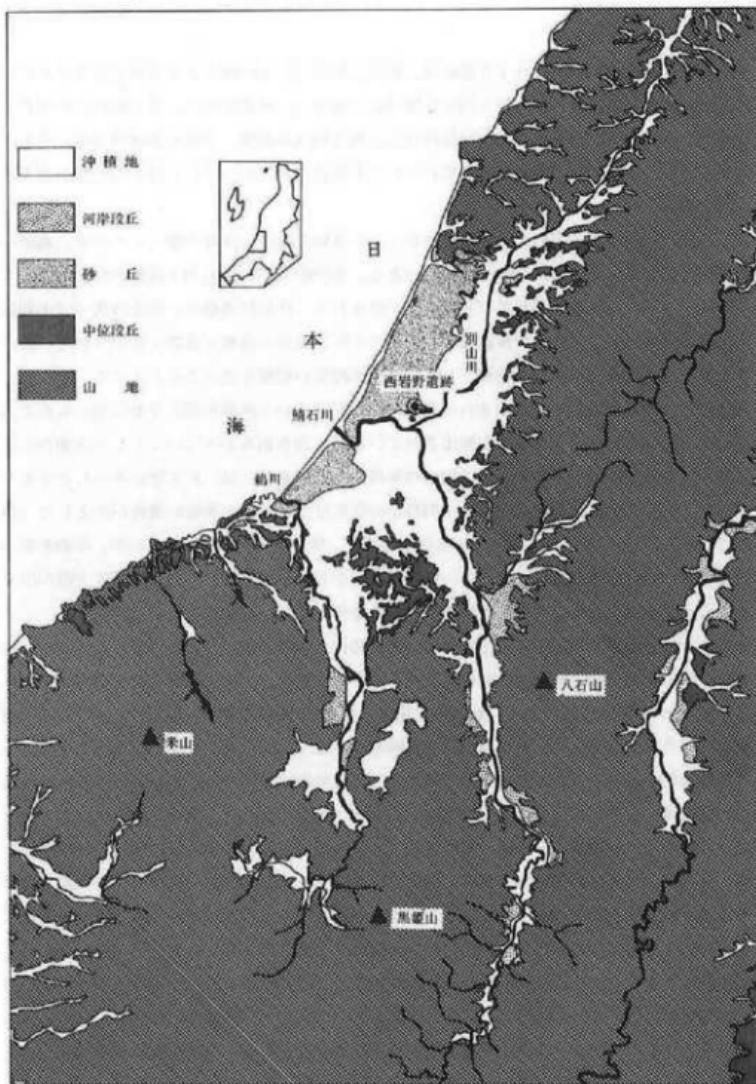
柏崎平野概観 西岩野遺跡の所在する柏崎（刈羽）平野は、新潟県の中央西部に位置し、鶴川と鯖石川及びその支流別山川を主要河川として成立した臨海冲積平野である。この平野は、北西部を日本海に開口するが、三方を米山、黒姫山、八石山を頂点とする山地や丘陵によって囲まれている。平野の構造は、日本海から荒浜砂丘、後背湿地（沖積地）、段丘、丘陵となる。火山性山地であった米山山塊を除く丘陵部は、褶曲構造に強く支配され、北北東—南南西方向の背斜軸に沿った丘陵が幾重も形成されている。荒浜砂丘も、この軸線に平行しており、砂丘形成前の基盤が丘陵の一部であることを窺わせる。

平野中央部を占める沖積地は、刈羽三山を源として北流する鶴川と、鯖石川及びその支流で向斜軸に沿い南西に流れる別山川によって形成された氾濫性湿地である。本地域の沖積層である柏崎層の深度は、100mを超える。昔、鯖石川の河口が飛砂等によって閉ざされて鶴川に合流するとともに、周辺部は鏡ヶ沖と称する潟湖状を呈したという伝承が今も地元に残っている。鯖石川や別山川流域は、鶴川流域のそれよりも2~3m標高が高く、また現両河川の中間地域には古い自然堤防状の微高地が認められるなど、伝承が裏付けされる。

西岩野遺跡がのる台地は、米山海岸で岩野面と呼ばれる中位段丘であり、この分布は安田南部地域、別山川左岸の丘陵沿いに広く分布している。米山海岸における中位段丘堆積物は岩野層とされるが、その他の安田南部や荒浜砂丘下等では安田層とされている。安田層の上には、番神層と称される古砂丘砂が海岸沿いに堆積し、米山海岸では下位段丘が形成される。

西岩野遺跡周辺の地形 西岩野遺跡は、荒浜砂丘内から派生し、東側の沖積地に細長く突き出た中位段丘上に立地する。この付近の荒浜砂丘は、標高が80m近くに達するが、鯖石川に接すると急激に高度を下げ、沖積地に没している。荒浜砂丘砂と呼ばれる新期砂丘砂は、30~40mにも達するが、新期砂堆積以前の比較的平坦な地形が、砂丘西側の砂取現場等で観察される。これらのことから、少なくとも松波、荒浜、正明寺といった地区的砂丘下には、標高30m程の段丘状地形が埋没していることが推定され、遺跡も多く分布している可能性が高い。

遺跡が立地する細長い台地は、国道8号線が横切るあたりで沖積地に没するが、微高地状の地形は更に東に延び、別山川に接する付近で周辺の沖積地と同化する。鶴川と別山川の合流点付近を中心とした一帯は、標高6m前後とほとんど高低差の少ない沖積地が広がる。両河川は蛇行が著しく、各所に形成された自然堤防は、柏崎平野でも最も顕著となっているが、これら自然堤防上に営まれていた遺跡の大半は中世以降であり、その形成は比較的新しいものと考えられる。このため、西岩野遺跡の主体的時期である弥生後期には、鯖石川や別山川といった河川は、常に氾濫するといった不安定な状況にあったと考えられる。



第1図 柏崎平野地形分類図 (1:200,000)

2 歴史的環境

柏崎平野及びその周辺に分布する遺跡は、鶴川、鍋石川、別山川などの流域に形成された河岸段丘や自然堤防及び海浜部の砂丘内や丘陵内に立地する。時期的には、縄文時代から中世、近世に至るまでの遺跡があるが、旧石器時代から縄文時代草創期、早期の遺跡は明確にされていない。また、古墳時代の所謂高塚古墳についても確認されておらず、古墳分布の空白地帯となっている。

第2図は、柏崎平野でも西岩野遺跡を中心とした遺跡分布図（塚等を除く）である。範囲は、柏崎平野中央部から東北部にかけてのものである。地形的には、鍋石川下流域や別山川中・下流域を中心とし、海浜部の砂丘及び丘陵地城が含まれる。西岩野遺跡は、縄文時代では中期後半から後期初頭、弥生時代では後期後半、そして中世、近世の遺構と遺物が検出されている。このため、西岩野遺跡に関わる時期を主体に歴史的環境の概略を述べることとする。

縄文時代 西岩野遺跡から検出された遺物は、中期後半から後期初頭に至る時期のものであるが、出土量は少なく、また遺構も検出されていない。調査面積が少ないことから該期の主体が別地点にある可能性もあるが、現段階では東接する岩野遺跡（16）に主体があったとすることが妥当であろう。岩野遺跡からは、中期後半の住居址3軒のはか多数の遺物が出土した（関ほか、1980）。しかし、調査は遺跡の一部だけであり、集落全体を把握できないが、中期末葉から後期初頭の遺物は確認されていない。西岩野遺跡からは、後期初頭の三十種場式土器が出土しており、可能性としては岩野遺跡西半に当期の主体があったと想定される。

西岩野 = 岩野遺跡の周辺半径約3kmには、縄文時代の遺跡は現在のところ確認されていない。周辺における主要な縄文時代の遺跡は、北から刈羽大平遺跡、小丸山遺跡、野崎遺跡、刈羽貝塚（40）、西ヶ峯縄文遺跡群（24～26）、与三遺跡（18）、十三仏塚遺跡等がある。このうち中期後葉に比定される遺物が出土した遺跡は、野崎遺跡で出土したという火炎系の土器1点のはか、十三仏塚遺跡が掲げられ、近くでは与三遺跡から少量検出されている。現在のところ当該地城では、岩野遺跡が中核的集落であったと考えられる。後期初頭の三十種場式土器が確認された遺跡は比較的多く、刈羽大平遺跡、野崎遺跡、西ヶ峯遺跡、天神社遺跡及び与三遺跡が掲げられる。該期における中核的な集落跡は、柏崎平野東北部では野崎遺跡、東部では西ヶ峯・天神社兩遺跡ということができるようである。但し、岩野遺跡で今後後期初頭段階の集落が確認されれば、西ヶ峯遺跡等は別山川下流左岸、岩野遺跡は右岸の中核となると推定されよう。

弥生時代 中期までの遺跡としては、小丸山遺跡、下谷地遺跡（31）、野附遺跡（30）等がある。立地としては、小丸山遺跡が砂丘内に営まれていたのはかは、沖積地に占地していた。しかし、砂丘内とは言っても、小丸山遺跡の場合は池状地形を中心とした湿地性の遺跡であり、該期の遺跡は概して低地性の遺跡を言うことができる。

西岩野遺跡で主体的な後期後半に相当する遺跡は、内越遺跡、野崎遺跡、刈羽大平遺跡、刈羽貝塚、西谷遺跡（41）、関野遺跡（9）等のはか岩野遺跡でも比較的まとまって出土してい

る。正式に調査されて遺構を伴った遺跡は、内越遺跡（横山ほか 1983）のみで、他は遺構が検出されなかったり、表採資料であったりするため、集落の概略等詳細は不明である。後期後葉から終末にかけての遺跡は、そのほとんどが段丘上や尾根等の高台に立地し、高地性の集落として注目されているが、柏崎平野における該期についても同様の傾向が指摘できる。沖積地に営まれた例外的な遺跡としては、関野遺跡や最近調査された戸口遺跡がある。関野遺跡は、発掘調査がなされたことがないため、実体は不明だが、弥生時代後期後葉から中世まではほぼ連続して営まれており、今後更に注目していく必要がある。

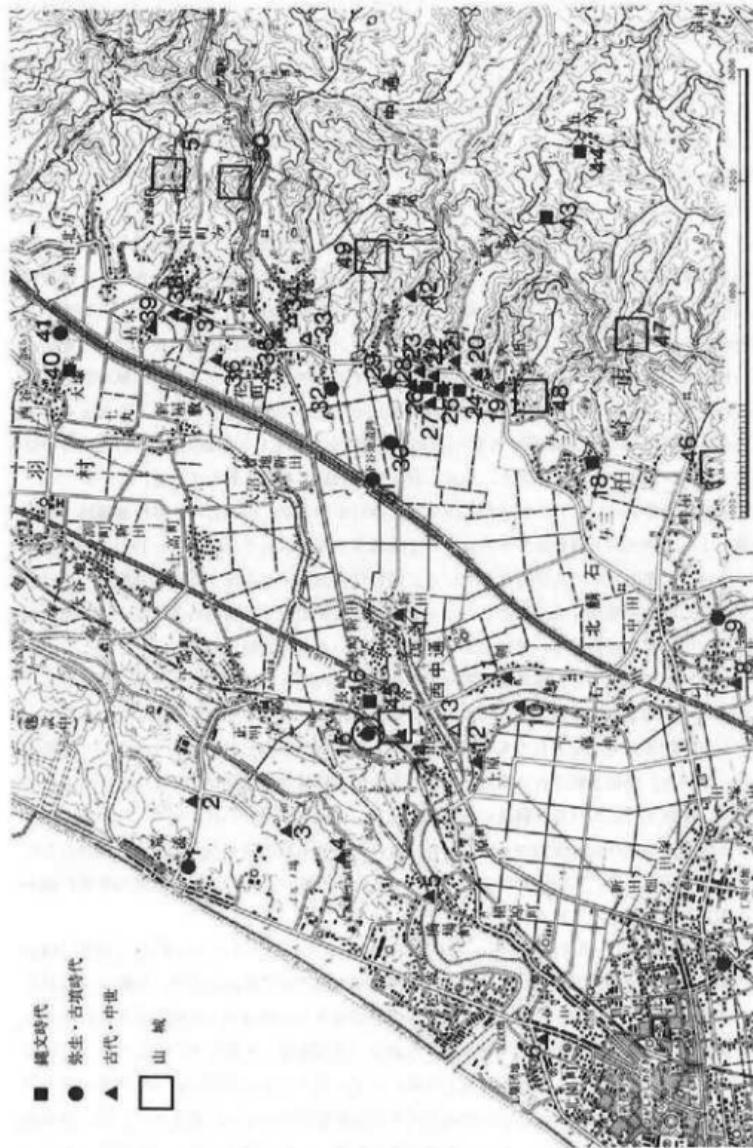
中世 西岩野遺跡周辺に所在する中世の遺跡は、主に城館跡と一般集落跡とに大別される。前者は東側の丘陵地帯に築かれ、北條城や赤田城に関連した山城が多く分布する。後者は、鶴石川流域の自然堤防上や、丘陵等の裾部である地形変換線付近の沖積地等に多く分布する。西岩野遺跡からは、台地縁辺に巡る溝遺構が検出され、何らかの館跡的性格を有する可能性がある。地元には岩野城が、西岩野＝岩野遺跡が占地する台地上にあったとする伝承が残されている（西中通 1974）が、绳文時代の石器等が拾えることから想像されたものとも考えられる。但し、西岩野遺跡から南200m程にある八王子神社境内を中心とした尾根（遺跡の占地する中位段丘の一部）に空堀等の遺構があり、現在これを岩野城跡（45）と称している。

一般的な集落跡等については、調査例が乏しく実体は不明だが、（旧）吉井小学校裏遺跡（23）では溝によって囲まれた建物址や井戸址及び土壙墓等が検出されており（品田 1985a）、木製品が多く出土する遺跡としても注目されている。鶴石川と別山川が合流する西中通地区一帯は、古代～中世の遺跡が集中する地域のひとつである。長崎新田、下大新田の各集落がのる敵高地や合流点付近の自然堤防上等に遺跡がかなり広がっているものと推定される。

近世 近世に至ると、集落の位置や道路網等は、現在とはほぼ同じであったと推定され、現状によって概略を把握することができる。集落は、中世に成立していた場所を中心に面的に広がった継続的集落と推定されるものが大半であるが、所謂新田として新しく成立した集落も多くなっている。新田と称される新しい集落の成立は、沖積地の開発が水田を中心に進んだことを示す。柏崎平野における沖積地の全面的開発は、概ね中世に行われたと考えられる。中世における開発＝水田化は、量的なものであり、近世における質的発展への基礎となり得るものであったと推定される。新田の分布が、本村のある丘陵や砂丘の縁辺から沖積地の中央に向かっていたことから裏付けされる。

西中通地区東端には、柏崎から長岡へ至る長岡街道が通っている。このルートは、正保2（1645）年の「越後絵図」や天保2（1831）年の「妙法寺村明細書上帳」等によれば、柏崎から春日を通り、橋場で鶴石川を渡って正明寺に抜け、西山町妙法寺から越えて長岡に至るものである。地元では東西に細長い岩野の台地上を貫通する道を“長岡街道”と称しているようだが、実際は、橋場からのぼった砂丘上で長岡街道と分岐した道であり、下大新田を通じて吉井に至る道路であったと推考される。この道がいつ頃までその重要性があったかは定かでないが、沖積地の開発に伴い平場の道が完備されたり、山本の渡船が確立もしくは橋ができる頃にはほとんど

(国土地理院発行 1/50,000 地形図
明治44年測量・昭和43年縮製・昭和26年修正)



第2図 西岩野道跡の位置と附近の遺跡

周辺の遺跡地名表

番号	遺跡名	種別	立地	時代	番号	遺跡名	種別	立地	時代
1	船形浜小裏遺跡	包蔵地	砂丘	古	27	椎田町遺跡	包蔵地	沖積地	平～中世
2	荒浜庚申塚遺跡	包蔵地	砂丘	奈・平	28	戸口遺跡	集落跡	沖積地	古(中)・平
3	荒浜小裏B遺跡	包蔵地	砂丘	奈・平	29	礼坊遺跡	集落跡	沖積地	古時・古田・平
4	荒浜小裏A遺跡	包蔵地	砂丘	奈・平	30	野附・萱場遺跡	集落跡	沖積地	弥昭・古田・平
5	圓運動遺跡	包蔵地	沖積地	平	31	下谷地遺跡	集落跡	沖積地	弥(中)
6	桜木町遺跡	包蔵地	砂丘	平	32	行原遺跡	包蔵地	沖積地	古(前)・中・近世
7	雀森遺跡	包蔵地	散高地	古(前)	33	杉ノ木田B遺跡	包蔵地	沖積地	
8	前田遺跡	包蔵地	自然堤防	平～中世	34	杉ノ木田B遺跡	包蔵地	沖積地	
9	四野遺跡	包蔵地	沖積地	弥(末)～平	35	北田遺跡	包蔵地	沖積地	中世
10	墳川原遺跡	包蔵地	自然堤防	中世	36	金原遺跡	包蔵地	自然堤防	奈・平～中世
11	下川原遺跡	包蔵地	自然堤防	古～平	37	桔木A遺跡	包蔵地	沖積高地	平
12	上原遺跡	包蔵地	自然堤防	中世	38	刈羽窯址	窯跡	台地	平
13	角田遺跡	包蔵地	自然堤防		39	桔木B遺跡	包蔵地	沖積高地	奈・平
14	宮の浦遺跡	包蔵地	沖積地	平	40	刈羽貝塚	貝塚	台地	縄(中)
15	西岩野遺跡	集落跡	台地	弥(末)・中近世	41	西谷遺跡	包蔵地	台地	弥
16	岩野遺跡	集落跡	台地	縄(中～後)	42	吉井掘ノ内遺跡	包蔵地	谷奥	中世
17	中才見遺跡	包蔵地	自然堤防	中世	43	坂寺遺跡	包蔵地	丘陵	縄(中)
18	与三遺跡	包蔵地	台地	縄(中～後)	44	五分一遺跡	包蔵地	丘陵	縄(中)
19	本村遺跡	包蔵地	沖積地	中世	45	岩野城跡	山城	台地	中世
20	草薙遺跡	包蔵地	沖積地	中世	46	畔屋城跡	山城	丘陵	中世
21	西草薙遺跡	包蔵地	沖積地	平～中世	47	高内城跡	山城	丘陵	中世
22	吉井水上遺跡	包蔵地	沖積地	平～中世	48	矢田城跡	山城	丘陵	中世
23	鶴吉井小裏遺跡	集落跡	沖積地	古(後)～中世	49	菊尾城跡	山城	丘陵	中世
24	赤坂遺跡	包蔵地	台地	縄(中)	50	赤田城跡	山城	丘陵	中世
25	西ヶ原遺跡	包蔵地	台地	縄(中～後)	51	赤田古城跡	山城	丘陵	中世
26	天神社遺跡	包蔵地	台地	縄(後)					

廃れたものとおもわれる。

以上、西岩野遺跡をとりまく歴史的な環境について述べてきた。周辺の遺跡分布図のうち、荒浜砂丘についてみると、砂丘の北西側——つまり日本海側には遺跡が確認されているが、内陸の南東側——つまり風下に至っては半島状に突出した岩野の台地以外はほとんど遺跡が確認されていない。西岩野においても、近世に至ってからの飛砂の被害がかなりのものであったことが確認され、地元の伝承にも残されている。近世において比較的規模の大きな砂丘形成があつたことを裏付けするものと言える。風上側に遺跡が確認されながら、風下側に認められない事実は、遺跡が皆無ということではなく、砂丘下の中位段丘上等に立地した多数の遺跡が、砂によって埋没してしまったものと考えられる。

今後、これらの遺跡が確認され、調査が及ぶことになれば、本地域の歴史がかなり明確にされるものと考えられる。

III 遺跡の概略

1 遺跡概観

西岩野遺跡が立地する岩野の台地は、地質学に言うところの中位段丘に相当し、更新世の安田層を基盤とする。標高は概ね25~30mで、西から東へ緩やかに傾斜している。周辺の沖積地は、溜池と水田が広がり、比高差約20~25mを計る。台地は、西側を荒浜砂丘下に没し、東に細長く延びているが、途中南東の八王子神社に向って細い尾根が派生する。また台地東端は二又に分かれ、浅い小谷が形成される。台地の延長は、荒浜砂丘の基部から金泉寺付近まで約800m、幅は約150m程である。台地は、国道8号線が横断するあたりで急に高度を下げるが、現別山川を越えた沖積地までその影響が認められ、総延長は2km近い規模で沖積地に没している。現在の岩野台地は、県道と国鉄越後線によって分断されている。越後線は、台地の最もくびれた部分を切通したものであるが、地元では2分された両者を各々西岩野、東岩野と称している。

岩野台地を中心とした地区で確認された遺跡は、現在のところ4カ所である。4カ所の遺跡とは、西岩野に占地する西岩野遺跡、東岩野の岩野遺跡、八王子神社境内を中心とする岩野城跡、その南側裾部に広がる宮の浦遺跡である。

岩野遺跡は、昭和49年に宅地造成に伴い緊急発掘がなされた。調査は部分的で、全面調査には至っていないが、遺跡東半において縄文時代中期後半の集落が確認されたものである。発見された住居址は、複数分も含め3軒であったが、遺跡全体では10軒程の集落であった可能性が強い。遺跡東側には浅い小谷が形成されているが、集落はこれを巡った所謂馬蹄形に近い構成をもって成立していたと類推される。現在では、この付近一帯から台地南半は、宅地造成が終わっている。後期の集落については、当時の調査では良好な包含層が認められず、また遺物の出土も報じられていないが、長岡市岩野原遺跡（駒形ほか、1981）のように後期の集落が、岩野の台地上にあったことは確かとおもわれる。

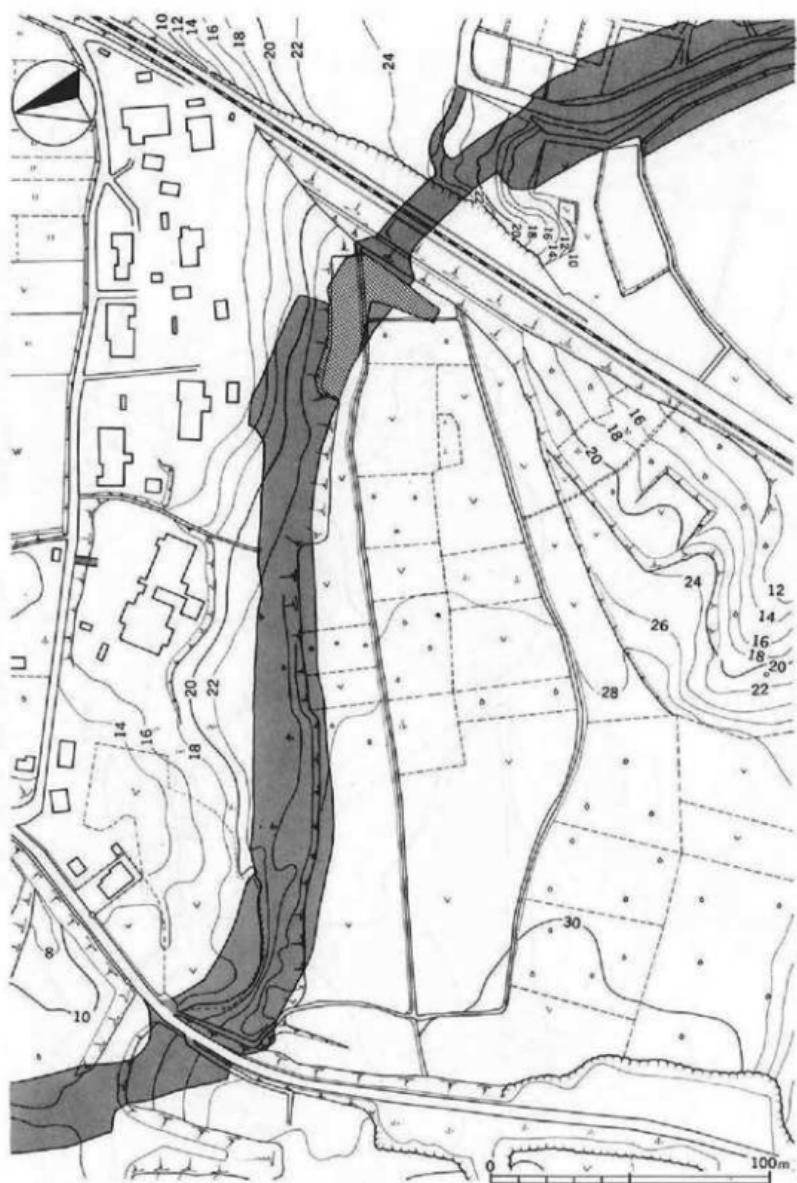
岩野城跡は、尾根先端に構築された小規模な砦に近いもので、標高17m前後を計り、水田面との比高差は10数mしかない。伝承では、守将上杉重房とされている。その麓に立地する宮の浦遺跡は、南向緩斜面において、平安時代の須恵器等が採集されている。中世の遺物も多少は検出されており、城跡との関係にも興味ある遺跡と言える。

西岩野遺跡は、荒浜砂丘に接する付近から越後線によって断ち切られる台地部一帯を、一応の範囲としておきたい。昭和58年に実施された県教委による分布調査においては、新池を南東に見降す、谷頭上方の畑から弥生時代後期と考えられる土器片少數が表面採集されている。現在のところ遺跡の明確な範囲は、西岩野東半部と言うことができるが、表砂層に置かれた西半部においても確認される可能性が強いとおもわれる。

相模市街図（1:2,500）其4（昭和47年）
縮刷・測図

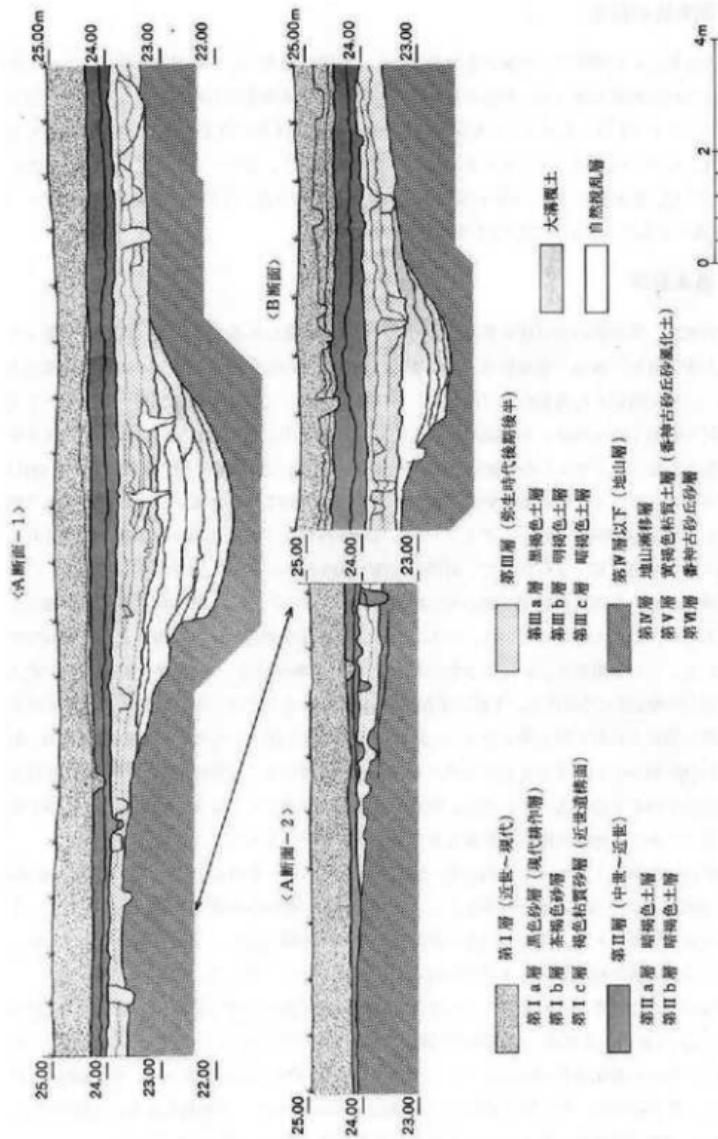
第3図 岩野台地の道路と地形（1:5,000）





第4図 西岩野道路の現況と調査区

(昭和54年道路改良工事荒浜安田新道線平面図 図面全32葉の1)
柏崎土木事務所を一部改変



第5图 西岩野进路·基本剖面断面图 (1:100)

2 調査区の設定

調査の対象とした範囲は、西側の県道を境とし、西岩野の北辺から越後線を横切った東岩野西端部までの台地部であった。発掘調査の対象地区は、予備調査でB地区とした台地平坦部のみとした。グリッドは、大グリッドを10m四方とし、軸線は任意に設定した。名称は、西から東へA、B、C……のアルファベットを、北から南へは1、2、3……のアラビア数字とした。小グリッドは、2m四方とし、西から東へ数え、北から南へ5段、計25コマを設定した。グリッドは、"A-3⑤グリッド" というように呼称した。

3 基本層序

岩野台地は、更新世の安田層を基盤とし、その上層を10数mに及ぶ番神層(第VI層)が覆って成立した中位段丘である。番神層は、荒浜砂丘に独特な古砂丘砂であるが、この上面は風化されてローム層に類似した黄褐色土(第V層)となっている。この第V層は、E-3グリッドでは第VI層が露出するためはほとんど認められないが、その周辺、とくにE-5グリッドでは非常に厚くなる。E-5グリッドから検出された大溝南壁は、全てこの第V層で構成され、1.4m以上の厚さとなっている。この第V層の上面には若干の漸移的な層があるが、これらを含めて地山層としたい。地山層は、E-3グリッドからほぼ東西のラインを尾根とし、北と南にそれぞれ傾斜する。南側はE-5 G付近で、頂部から20~30cm程低い平坦な面を形成している。

第III層は、地山が南に傾斜する面のみに検出され、北斜面については中世の擾乱を考慮する必要があるが、ほとんど延びていないようである。地山前面斜面は、第III層によって概ね平坦にしている。この第III層は、a~cの3層に細分される。細分層は、第IIIc層の明褐色土を境とし、上層の第IIIA層は黒褐色土、下層の第IIIC層は暗褐色土を呈していた。時期的には全て弥生後期後葉に集約されるものと考えられる。遺物が比較的多く出土したのは、第IIIB層であり、第IIIA層や第IIIC層からの出土はそれほど多くなかった。遺構の多くは第IIIB層あるいは第IIIC層を掘り込んだものが主体と考えられるが、確認できたものは少ない。なお、第III層は、大溝上部で若干凹んでおり、堆積段階にも影響を受けていたことが窺われる。

第II層は、暗褐色土層で、全体的に粗い感じを受ける上層(第IIa層)と、密な下層(第IIb層)とに細分される。第IIa層上層部からは、16世紀末頃の肥前系陶器が少量出土しており、下限をある程度類推させる。遺物の出土が稀な層で、無遺物層に近い。北向斜面部には、中世と考えられる溝遺構が検出され、本層に類似した土が覆土となっている。

第I層は、近世以降に飛砂等によって積った砂丘砂層である。第I層は、a~cの3層に細分される。第Ic層は、第II層との漸移的な層で、かなり粘性の強いものである。第Ia層は、現表土層で、耕作や植物遺体(根等)によって黒色を呈し、若干の粘性を伴うが、第Ib層は、純粹な全くの砂丘砂であった。第Ic層は、ある程度の期間にわたって堆積したものと推定され、その上面には掘立建物址2棟と小屋とおもわれる竪穴状遺構が、構築されていた。

IV 遺構

1 遺構の分布と概略

今回調査した範囲は、法線内の平坦地約800m²と遺跡全体の極一部でしかなく、更に、遺跡の主体部からはずれた位置にあった。しかし、細長い台地中央のくびれた部分を調査したわけで、地形的に観れば特殊な場所であったとも言えるだろう。

検出された遺構は、弥生後期、中世、近世の3時期にわたり、分布は、尾根筋以北では主に中世の遺構が構築され、中央には近世、以南には弥生後期の遺構が各々分布する傾向にあった。この現象は、多分に包含層の分布に影響され、概に当時の状況を具現したものとは言い難い。また、中世の遺構は、一般的な居住的集落を意味しないと考えられ、遺構の構築位置は、一面特殊と言える。

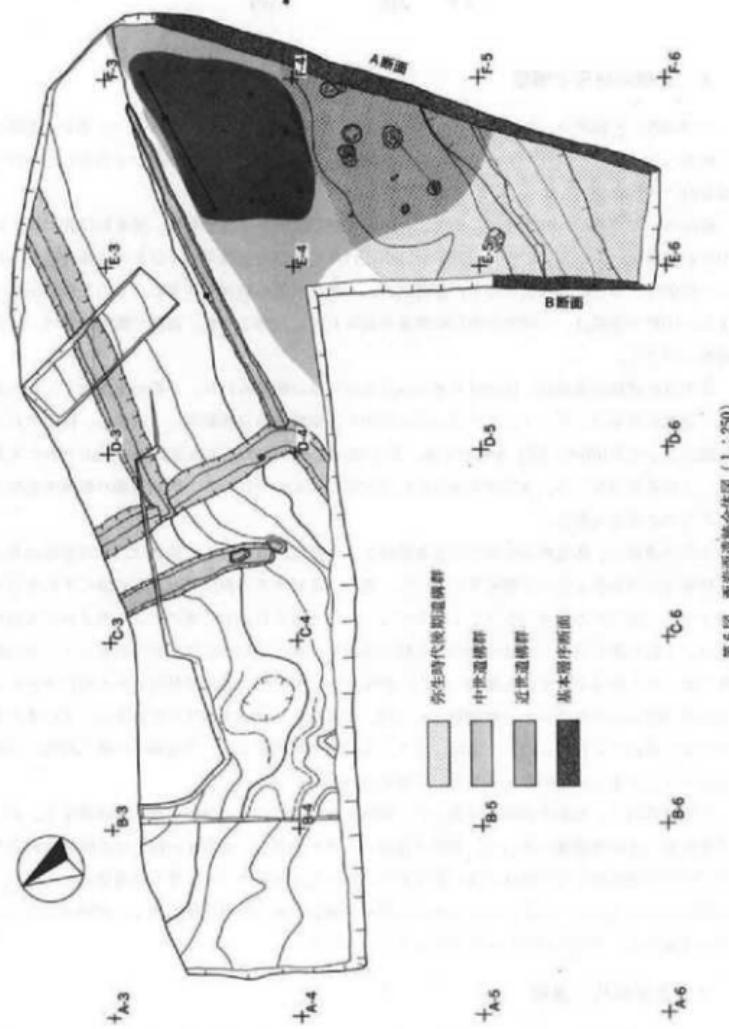
弥生時代後期の遺構は、住居址と考えられる柱穴及び炉址のほか、多数の土坑やピットがある。遺構の分布は、E-4、5グリッドに集中し、第III層の分布範囲と一致する。検出された遺構は、全て第IIIb層に関わるものであったと推定される。また第III層直下に検出された大溝は、共伴遺物がないが、後期後半からそれほど隔たるものではなく、概ね後期の範疇で把握されるものと考えられる。

中世の遺構は、溝遺構を主体とする遺構群と、土壙に区分される。前者は、北向緩斜面及び小規模な沢状地形を巡って構築されていた。溝は、合計4本が検出され、等高線に平行するものの2本と、直交する2本の各々が1組となっていたと考えられる。溝によって開まれた平坦地には、上段の溝に沿って4個の直列する柱穴があり、他にこれらに伴う柱穴がないことから柵址であったと推定される。土壙は、沢内に検出されたもので、2基が接近されて検出されたが、周辺には認められなかった。埋納物としては、1基から六道鏡が出土したのみで、骨片等の遺体は全く検出されなかった。土壙は、2基とも空堀と重複するが、空堀覆土の確認段階では確認されず、土壙のほうが古かったものと推定される。

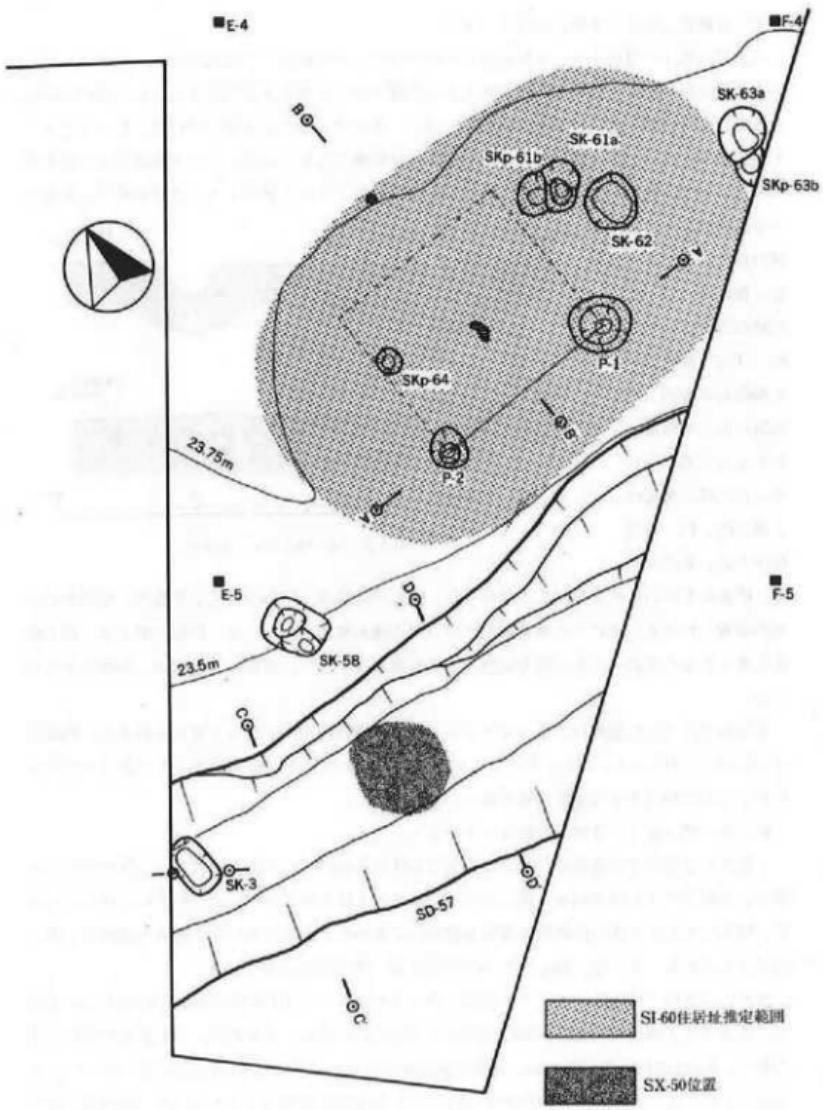
近世の遺構は、台地平坦部に分布する。検出された遺構は、2棟が重複した建物址と、堅穴状遺構及び道路状遺構であった。道路状遺構は、その北側と、南側1m幅には遺構が検出されず、近世の遺構群とは同時性の強い併存関係にあったと推定される。堅穴状遺構については、評価のわかれどころであるが、小屋等の簡単な施設であった可能性が強く、建物址のうち本址と重複しない1棟と併存していたものと考えられる。

2 弥生時代の遺構

当該期に属する遺構は、住居址1軒、土坑2基、ピット56基、大溝1条であるが、大溝を除いた遺構の全ては、後期後半の所産である。



第6圖 西秦皇道標全體圖 (1:250)

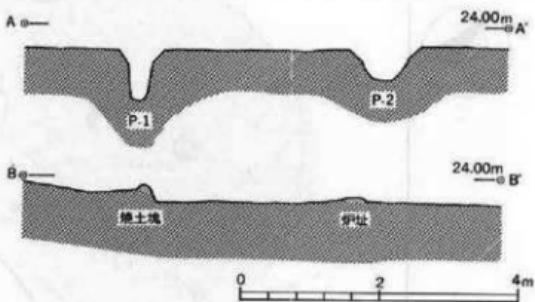


第7図 西岩野遺跡弥生時代の遺構 (1:100)

a) 住居址 (第7~8図、図版4-2)

当該期に属する遺構中で、住居址として確実なプランを検出した遺構はない。しかし、以下に述べる遺構は、その状況から住居址として把握することが最も妥当と考えられるものである。

S I - 60住居址 (第7~8図、図版4-2) 本址は、調査区南側の平坦部、E-4グリッドから検出された。平面形は、発掘中においては明確でなかったが、コンタ測量による微地形の確認や、地山面の観察から、第7図に示した梢円形プランと推定した。推定規模は、長軸8~9m、短軸6m前後の比較的規模の大きい住居址となった。長軸の方位は、N-82°-Eと、概ね東西の軸線にのるが、等高線に沿って設定されたものと考えられる。柱穴は、南辺の2基(P₁、P₂)のみ検出され、北辺から



第8図 SI-60住居址 断面図

は、精査にもかかわらず確認できなかった。柱穴の間隔は、3.6mを計る。炉址は、柱間中心からの垂線上にあり、更にこの延長線上には、焼土塊も検出されている。炉址の焼土は、固く焼きしまったものであったが、残存状態はあまり良くなかった。床面については、確認できなかつた。

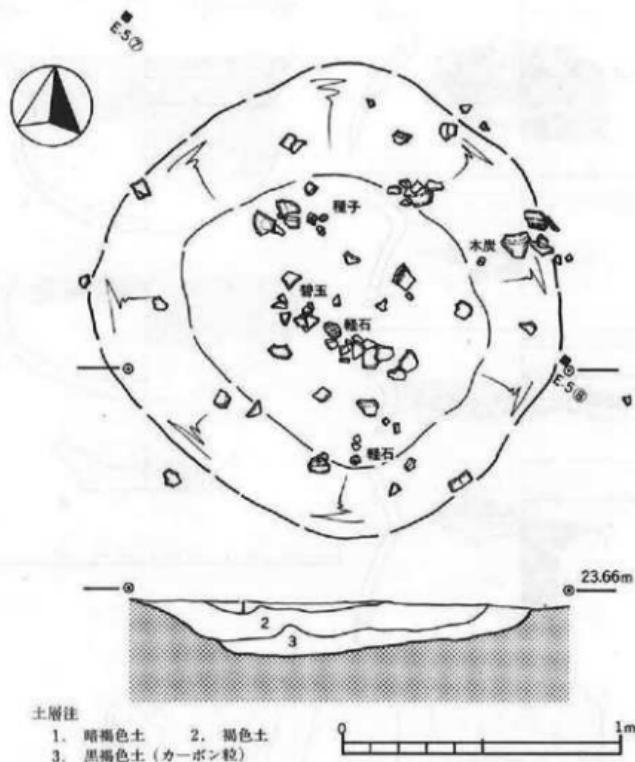
本址から出土した遺物は、E-4グリッド内出土遺物の大半が伴うと考えられるが、明確にするには至らなかった。但し、E-4グリッド出土遺物のうち第IIIc層出土として取り上げたものが、これに相当する可能性が最も強い。

b) 土坑 (第7、9図、図版5-1~2)

土坑として報告する遺構は、厳密な意味での区分を意図したものではなく、全体的にやや大型で、性格等が不明な遺構を一括したものである。土坑と称する中には、柱穴に近似したものや、壁がなだらかで浅い播鉢状の遺構も便宜的に含めた。土坑あるいは土坑状の遺構は、第7図で示したSK-3、58、61a、62、63a及びSX-50の合計5基である。

SK-3土坑 (図版5-1) 本址は、D-5⑩グリッド第IIIb層上面から検出されたもので、後述する大溝覆土の更に上層に掘られていたものである。平面形は、やや隅丸を呈した長方形で、長辺1.04m×短辺0.66m、深度は確認面から0.4mを計る。長軸の方位は、N-8°-Wを指向している。覆土は、暗褐色土を主体とし、全体的にややソフトであった。遺物は、弥生土器小片が少量出土したのみである。

SK-58土坑 本址は、E-5①グリッドから検出されたもので、平面形は概ね隅丸長方形



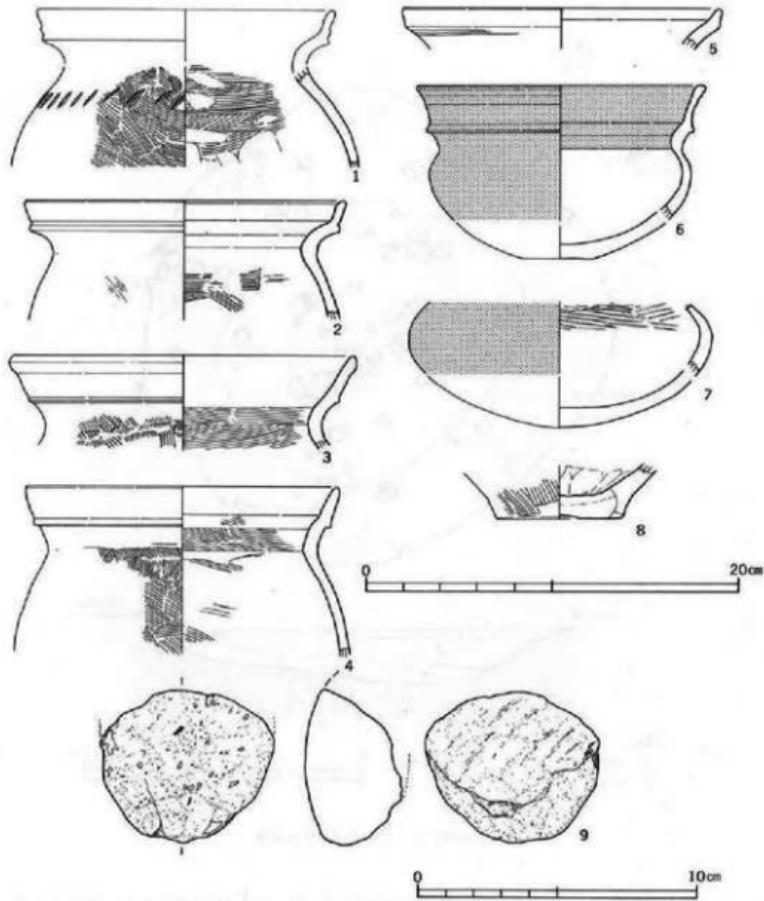
第9図 第IIIb層上面 SX-50土坑状遺構 (1:20)

を呈し、長辺1.16m×短辺0.88mを計る。長軸方位は、N-30°-Wを指向する。底面は、2つ的小ビットに分かれ、最深部は0.37mを計る。覆土は、黒褐色土を主体とする。遺物は、弥生土器小片を少量出土したのみで、図示できるものは皆無であった。

S K - 61a土坑 E - 4 ⑧⑨グリッドに検出されたもので、平面形はやや椭円形($0.90m \times 0.70m$)を呈する。断面形は2段となり、最深部は確認面から0.25mを計る。覆土は暗褐色土を主体とし、遺物は弥生土器小片を少量出土したのみであった。

S K - 62土坑 E - 4 ⑩グリッドで検出されたほぼ円形($0.96m \times 0.88m$)を呈する土坑で、深度は0.27mと浅い。覆土は、暗褐色土を主体とし、遺物もS K - 61aと同様で少なかった。

S K - 63a土坑 E - 4 ⑪グリッドから検出されたほぼ円形($0.98m \times 0.84m$)の土坑で、



第10図 西岩野第IIIb層上面 SX-50土坑状遺構出土遺物

深度は0.33mを計る。覆土は暗褐色土を主体とし、遺物は少量の弥生土器小片のみであった。

SX-50土坑状遺構（第7、9、10図、図版5-2） 本址は、E-5(7)グリッドを中心にして検出されたもので、第IIIb層上面で確認された。平面形は、概ね円形を呈するものと判断されるが、壁が緩やかで、立上がりが明確でなく、平面形態及び規模が不正確である。一応の範囲は、1.61m×1.57mであった。深度は、最も深い箇所で0.21mと浅い。覆土は、3層に細別され、上層には第IIIA層に近似した暗褐色土が薄く認められる。下層は、黒褐色土で、カーボン粒を多く含むややソフトな層であった。焼土は、覆土中からは確認できず、火を使用した遺構か

否かについては不詳である。

出土した遺物は比較的多い。主体を占めるのが土器片で、他に軽石及び碧玉やヒスイに類似した石材片、また木炭とともに炭化した種子が複数個体出土している。遺物の出土状態を観ると、比較的小さな土器破片が散乱する中に、他の遺物が混入した状態であった。

出土遺物 土器類は、甕が多く、次いで鉢、壺（第19図56）等である。なお、個々の観察等については、巻末の表にまとめたので、概略を記すのみとしたい。

甕（1～5） 二重口縁のものと、くの字口縁のものとに大別されるが、各々に多様性があり、さらに細別される。

甕A類（1、2） 二重口縁を呈し、下段の外反が強いもの（A₁類）である。1は、口縁部が欠損して形態は不明であるが一応本類に含めた。1は、肩部に櫛齒による刺突文が巡らさせ、全体的に粗雑さを感じさせ、外面にはススの付着が認められる。2は、内外面ハケ調整後、外面を平滑にした丁寧なものである。

甕D類（3、4） 二重口縁甕ではあるが、くの字口縁形態に近い。3は、口唇部がやや肥厚するもの（D₁類）で、口縁部内外面に炭化物が付着する。4の口唇部は、やや尖り気味の形態（D₂類）である。胎土は緻密で、丁寧なつくりがなされ、黒斑が認められる。

甕F類（5） 小片で形態は若干不明瞭である。比較的大なつくりがなされている。

壺（第19図56） 二重口縁を呈した精製品で、胴部は球形状を呈するもの（D類）と考えられる。外面及び内面の頸部まで赤色塗彩されている。

鉢（6、7） 二重口縁を呈するもので、折曲部が下方にやや強くのびる。また胴部形態は扁平となり（B類）、外面及び口縁部内面を赤色塗彩した精製品である。

底部（8） 比較的大形で、壺の底部と考えられる。底面は掲底となっている。

石製品（9） 石製品としては、軽石製品2点とヒスイに類似した石材破片5点（図版17-b～f）がある。前者は、ほぼ全面が磨られたものである。9は、楕円形の蝶状を呈したもの。残りと考えられるが、破口も若干角がとれており、再使用されている。後者のもの（図版17）については、面の一部が研磨され、玉等の製作を意図したような感じを与えるものである。5点のうち2点は接合した。類似した石材は、本址以外から出土していない。

種子 図示できなかったが、梅あるいはそれに類した植物の種子と考えられる。合計3点が検出されたが、内部まで全て炭化していた。

c) 大溝（第7、11図、図版6～7）

S D - 57大溝 大溝は、調査区南端のE-5グリッドから検出された。E-4、E-5グリッドは、南側へ緩く傾斜するが、本址は等高線に沿って構築されている。このため北壁は、なだらかな傾斜から壁となるため、大溝自体の幅が計測困難となっている。溝の幅及び深度は、東へ行くほど値を増す。規模は、溝底へ急傾するところを基準とすると、西端で幅3.52m、深度0.91m、東端では幅4.64m、深度1.54mを計る。確認された大溝の最大延長は、約13.4mとなるが、この部分の溝底傾斜は、水平から約5°であった。また、溝底における長軸線は、N-89°-

Wを指向し、概ね東西に延びている。確認された延長が、規模に対して小さく、直線で設定されたものか、曲線状を呈していたかについては不明である。

断面形態は、半円状を呈し、底面は丸味を帯びている。壁は、北側に古砂丘砂のブロックが露頭するため、複雑な形態の急斜面を呈している。

覆土は、8層に細分される。第8層は地山漸移層で、第7層が大溝使用段階に堆積した粘土層と考えられる。非常に固くしまっていった。第6層は、地山の第V層と同質の黄褐色土で、掘上げた大溝掘削土の流入土である可能性が強い。この段階に至って、大溝の存在価値が薄れたと考えられ、第4～1層の埋没土は、比較的短期間に形成されたと判断される。

大溝からの出土遺物は、使用時期を意味すると考えられる第6～8層からは全くの皆無であり、また上層からも皆無に近い状況であった。このため、遺物から大溝の時期を決定できないが、後期後葉に比較的近接した時期の可能性が最も強いと考えられる。なお、大溝の覆土最上層から、第21図95等の縄文土器が出土したが、混入と考えられる。

ピット群(図版4-1)

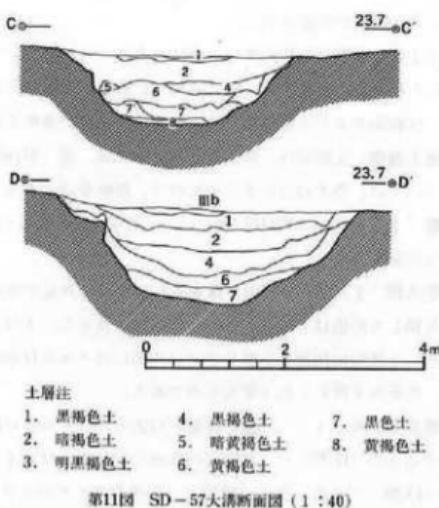
後期後葉に属するピットは、主にE-5グリッドの第IIIb層上面から検出された。検出数は、E-4グリッドの3基を含め44基余となるが、平面形が不整のものも含まれ、また規則的な配列も認められないため、性格等は不明である。遺物の出土も、土器小片が少量出土するのみであった。

3 中世の遺構

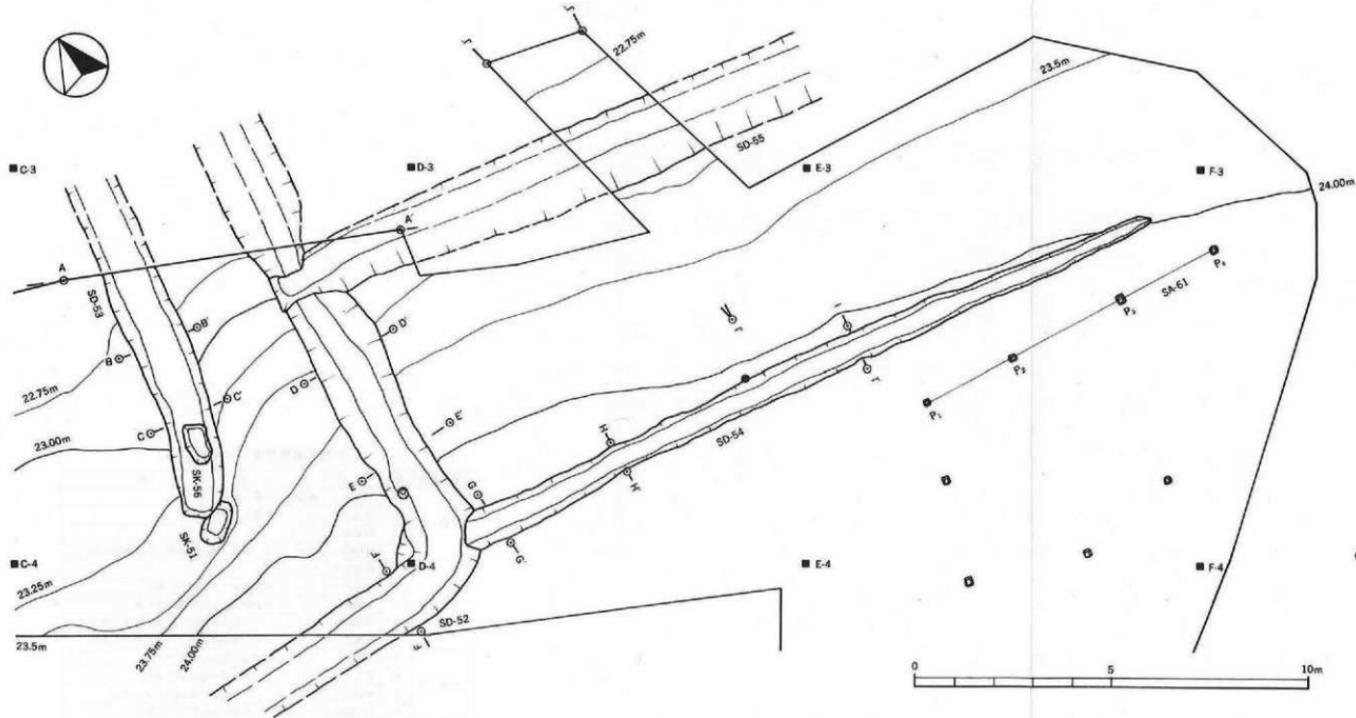
中世に属する遺構は、溝遺構4本と柵址と推定される柱穴4基のほか、土壤2基及び性格不詳の小ピット群が掲げられる。溝遺構及び柵址は、船跡であった可能性を指摘できるが、文献や伝承及び出土遺物からは、根拠となり得る確実なものではなく、今後に残された問題といえる。本稿では、一応各遺構を種別毎に説明することとした。

a) 溝遺構(第12～13図、図版8～10)

溝は、調査区北向傾斜面のC-E-3グリッドを中心にして集中的に構築されていた。溝は、



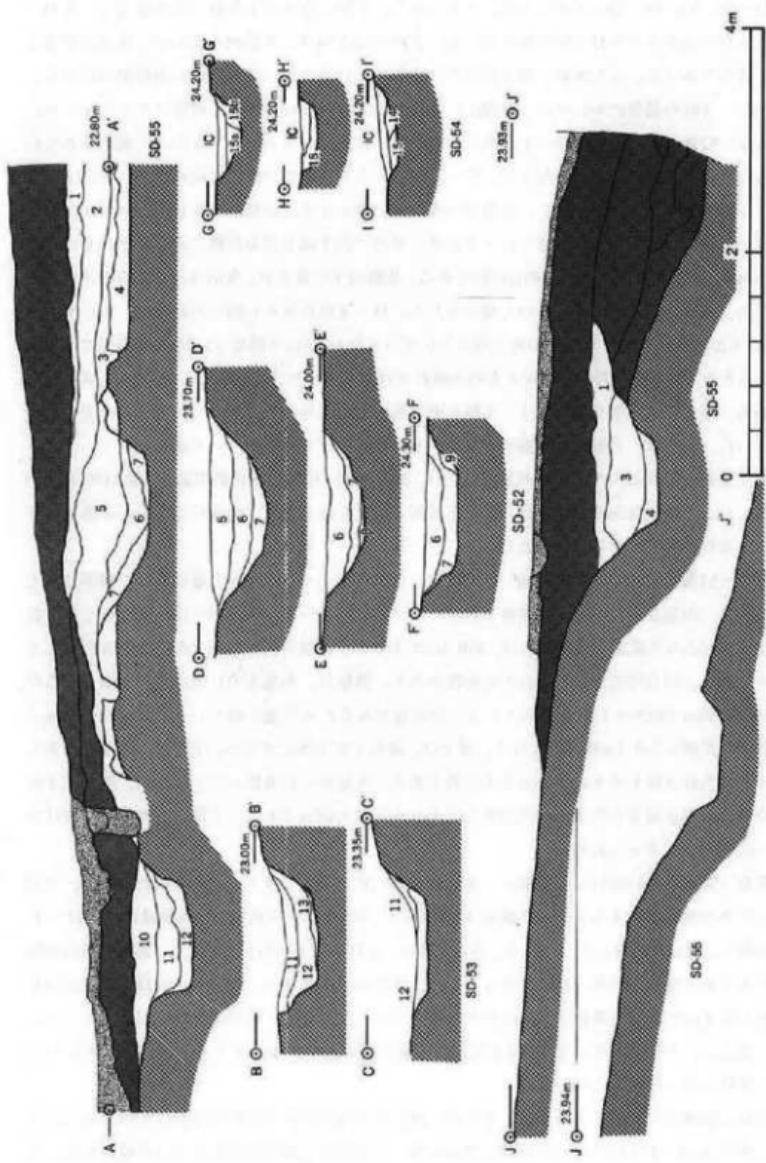
第111図 SD-57 大溝断面図 (1:40)



第12図 西岩野道跡中段の地構造 (1 : 100)

中世溝造構群覆土層注記

遺構名称	番号	土 色	説 明
SD-55	1	明褐色土	黄褐色土が多く混入。
	2	褐色土	ソフト。黄褐色土が少量混入。
	3	暗褐色土	ソフト
SD-52	4	暗黄褐色土	ややソフト。砂質。地山黄褐色土粒が多量に混入。
	5	暗褐色土	ややハード。
	6	暗褐色土	ハード。第5層よりやや褐色が強い。
SD-53	7	帆黒褐色土	ハード。地山黄褐色土が比較的多く混入。
	8	帆黒褐色土	かなりハード。地山黄褐色土が比較的多く混入。
	9	明褐色土	かなりハード。地山黄褐色土が比較的多く混入。
SD-54	10	褐色土	ソフト。極少量の地山小粒を含む。
	11	褐色土	ややハード。極少量の地山粒を混入。
	12	明褐色土	ややソフト。やや大粒の地山粒を多く含む。
	13	暗黃褐色土	ややソフト。緻細な地山粒を多く混入。
	14	暗褐色土	暗褐色土と地山粒が混入。
	15	黒褐色土	少量の地山粒が混入。



第13图 中板道带断面图 (1 : 50)

SD-52、53、54、55の4本である。4本のうち、単独で存在するSD-53を除くと、SD-54とSD-55が各々SD-52と接している。SD-52と54は、確認面の覆土が、後者は前者よりも暗色であった。またSD-52と55では、接点においてSD-52のそれと重複関係にある。しかし、今回の調査においては、時期的に差異のある重複なのかどうか明確にできなかった。

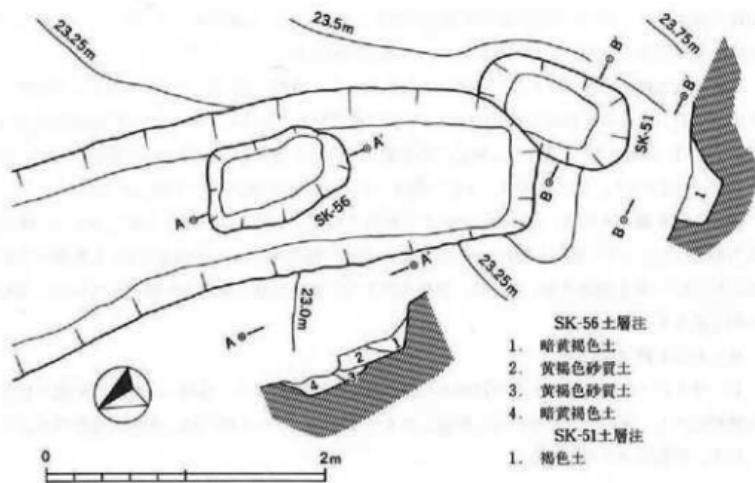
SD-52溝（第13図A、D～F断面） 本址は、C-3～4グリッドを中心に構築されていたもので、平面形はL字形を呈する。C-4グリッドの平坦地では、等高線に沿って設定され、D-4杭東側で折曲して北向し、北斜面の等高線に直交する。折曲部でSD-54、斜面下方でSD-55と接する。本址は、B～C-3グリッド内の沢上端を巡る位置に設定されたものと考えられる。確認された延長は、約13m程度である。北斜面下の延長は、数mほどで傾斜がきつくなるため、溝も途切れてしまうものと推定される。D-4杭付近から西への延長は、全く不明である。本址の確認は第V層以下の地山面において行ったが、幅は平坦部で1.45m、北斜面では1.60mから下方で1.84mと若干広くなるものの概ね平行するようである。深度は、0.25～0.30m程度である。覆土は、土層が暗褐色土、下層が明黒褐色土を主体としたもので、全体的に固くしまっていた。底面は、古砂丘砂が露頭する影響もあるが、ガリガリのハード面となっていた。

出土遺物は極端に少なく、珠洲系陶器2点（第21図96～97）と玉研磨用砥石（第23図114）が出土した。とくに珠洲系の陶器は、覆土上層部で出土したもので、数量は少ないが本溝の下限をある程度推定させる資料である。

SD-53溝（第13図A～B断面） 本址は、C-3グリッド内の沢上端に沿って構築されていた溝で、南端部が沢の形状に影響されやや西へよじれている。南端部では、土壤墓2基と重複する。掘込みの確認された延長は、約6.5mであるが、南端の沢下端部は若干傾斜を強くしており、本址と同目的造作が行われた可能性がある。溝幅は、南端部で1.02mと若干細くなるが、1.24～1.40mで概ね平行に掘られている。斜面部であるため計測が難しいが、下端で0.40m余、上端では沢側から0.1m程と浅くなる。覆土は、褐色土を主体とするが、下層では地山粒が多く混入し、古砂丘砂も含まれるため若干砂質である。本址からは遺物の出土はない。但し、本址の時期は、寛永通宝を含まない六道鏡を出土した土壤を切っており、上限は中世内、下限はSD-52溝同様と考えられる。

SD-54溝（第13図G～I断面） 本址は、D～E-3グリッドに検出されたもので、平坦面からやや北へ傾斜するところに構築されていた。平面形はほぼ直線で、長軸線はN-84°～Eを指向し、概ね東西線にのっている。溝の延長は、SD-52まで約19mを計り、東側の地山面標高が若干低くなるため徐々に細くなり、F-3杭手前で消滅する。溝幅は、SD-52付近の最大幅が約1mである。溝底は、ほぼ水平となっている。深度は、最深部で約0.16mとなっている。覆土は、上層の凹みに第Ic層が置い、下層は暗褐色～黒褐色土となっていた。本址からは、遺物は全く出土しなかった。

SD-55溝（第13図、J断面） 本址は、調査区北端の斜面下に検出されたものである。本址の断面図（J～J'）によれば、斜面が傾斜を強くする箇所に溝を設定したことが窺われる。本



第14図 土壌蓋平面・断面図

址は、西端部と中央の一部を発掘したのみで、確認できた延長11.5mがどこまで延びるかは全く不明である。溝幅は、約2mを計り、南壁は溝底付近で傾斜を強くする。深度は、南壁上端から0.80mを計る。溝底は、ほぼ平坦に造作され、しかもほぼ水平となっている。覆土は、褐色土を主体とするが、中層位には地山の黄褐色土粒が少量混入している。本址第3層は、SD-52の第5、6層同様の暗褐色土であるが、両者が同時に堆積したものか、別途に新しく第3層が堆積したものかは確認できなかった。本址からは、遺物は出土しなかった。なお、本址の北数mで斜面はかなり急となっている。

b) 樽 址 (第12図)

SA-61櫛址 本址は、E-3グリッドの平坦地に構築されたもので、近世の道路状遺構下から検出された。櫛に使用された柱穴は、4基が確認されたが、各柱穴の平面形は概ね方形状を呈している。各柱穴の法量は、P₁ (東西16cm×南北12cm、深度31cm)、P₂ (20×16、32)、P₃ (20×24、30)、P₄ (19×19、28)である。柱穴の深度は若干異なるが、底面の標高は概ね同じであった。各柱穴間の距離は、P₂-P₃が3.20mと間隔が広いが、P₁-P₂、P₃-P₄は各々2.44m、2.66mとなっている。4基の柱穴は、直線に並び、方位はN-87.5°-Wを指向し、東西線にほぼ沿っている。覆土は、古砂丘砂を掘削しているためか、砂質を層した黒褐色土で、ややソフトでしまりのないものであった。本址に伴う遺物は出土しなかった。

c) 土 壤 (第12、14図)

2基検出された土壤は、C-3グリッドの沢内に構築されていた。2基は互いに近接し、1

m程の距離をおくが、付近には他の土壤は検出されなかった。本遺跡A-3グリッドには、長崎地区の墓地があり、何らかの関係があったのかも知れない。

S K-51土壤 本址は、SD-53溝の先端部に接して構築されていたものである。平面形は、長方形を呈し、長辺1.16m×短辺0.63m、深度は確認面から0.35mであった。長軸線の方位は、N-52°-Eを指向する。覆土は、褐色土の単層であった。遺物は、上層から六道鏡(第25図122～127)が出土した、出土状態は、6枚が積重ねられ、何かの紐によって縛られていた。

S K-56土壤 本址は、SD-53溝底から検出された。平面形は、若干不整であるが、概ね長方形を呈している。長辺1.03m×短辺0.61m、深度は確認面から0.30mを計る。長軸線の方位は、N-15°-Eを指向する。覆土は、完全な埋土で、古砂丘砂と褐色土が混合している。遺物は何も出土しなかった。

d) ピット群(第12図)

E-3グリッドを中心とした平坦地から54基ほどが確認された。当初は、SA-61柵の柱穴を建物址とし、他の柱穴を検出中に確認したものである。ピット群には、規則的な配列も認められず、性格等は不明である。

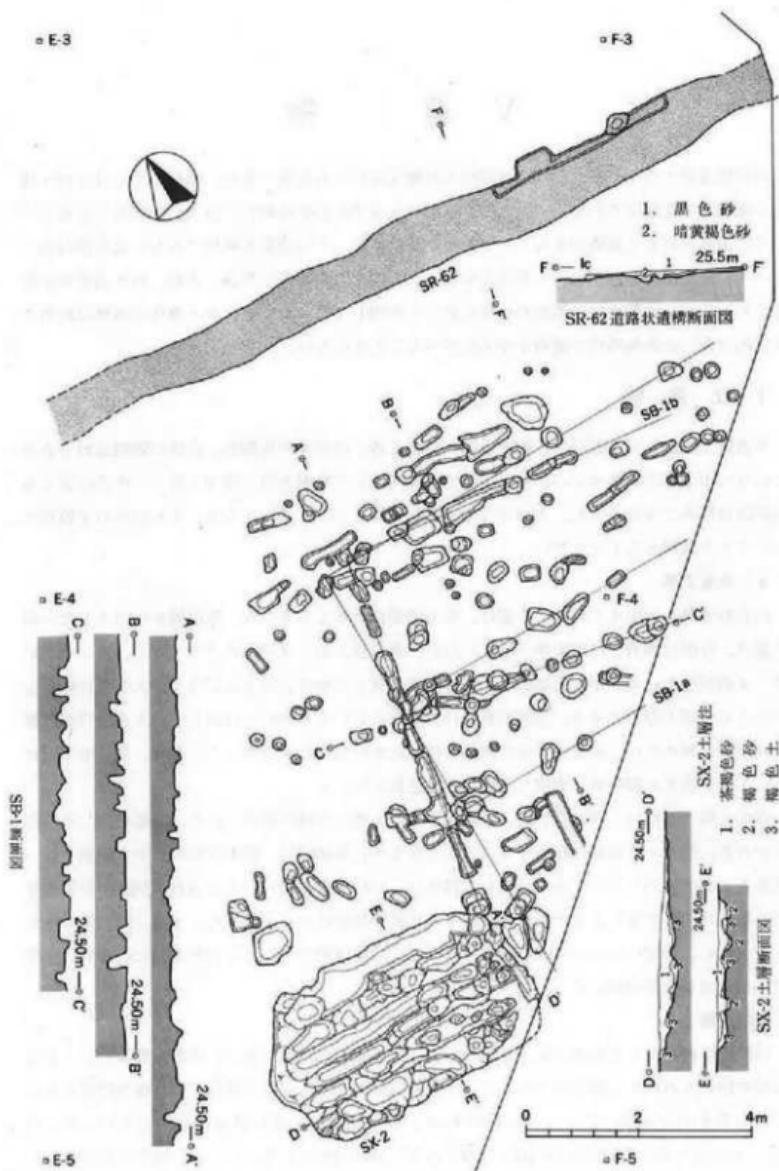
4 近世の遺構

近世の遺構は、第I層の表砂直下から検出されたもので、当時の生活面は、第II層上面から粘性の強い第Ic層上面と考えられる。

S B-1建物址(第15図A～C断面) 本址は、E～F-3～4グリッドに検出された。柱穴と考えられるピットか溝状構造が無数にあけられ、各柱穴の切合関係も複雑となっていたが、覆土が砂丘砂のため、新旧関係の確認は困難であった。柱穴等の配列からは、2棟の建物址が存在したと推定される。両棟とも東西に軸線をもつ切妻造りの屋根構造であったと考えられ、庇の存在も推定される。規模等については、完掘できなかつたため不明である。S B-1aは長軸線をN-89°-W、S B-1bはN-78°-Wを指向していた。

S X-2竪穴状遺構(第15図D～E断面) 本址は、E-4グリッド南側に検出された遺構で、平面形は概ね長方形を呈する。規模は、東西長軸4.20m×南北短軸2.40mを計る。覆土は新規砂によって充満していたが、底面は凹凸が著しく、溝状を呈していた。長軸方向は、N-88°-Wを指向し、S B-1a建物址とはほぼ同じであった。遺物としては、近世の陶磁器小片が数点出土したのみであった。本址は、床面と考えられる面が異常で、その性格は不明だが、S B-1a建物址に伴う小屋的な施設であった可能性が強い。

S R-62道路状遺構(第15図F断面) 道路状遺構は、F-3グリッドからE-3グリッドにかけて検出されたもので、第Ic層に類似した粘質砂のハード面として確認された。確認された道路幅は、約1mであったが、実際には2m近い規模であったと推定される。道路址は、方位をN-85°-Wにそっている。本址は、30～60cm程の新規砂に覆われていたが、その直上には現在まで農作業用の道が存在していた。



第15図 西岩野道路近世の造構群 (1 : 80)

V 遺 物

西岩野遺跡で出土した遺物は、時期的には縄文時代から近世に及び、表砂中からは近代・現代の遺物も少量確認されている。このうち主体をなすのが弥生時代であり、中世及び近世については遺構に対して遺物が少なく、また縄文時代にあっては遺構も検出されない客体的時期であった。出土遺物の種別は、土器類を中心とし、他に石器類や土製品、古鏡、自然遺物等が確認されている。本稿では、遺物の種別に従って説明して行きたいが、近・現代の遺物は除外し、主体的であった弥生時代の遺物を中心に述べることとしたい。

1 土 器 類

本遺跡で出土した土器類は、縄文土器、弥生土器、珠洲系中世陶器、近世の陶磁器類である。このうち出土量の最も多いのが弥生土器であり、次いで陶磁器類、縄文土器で、中世に属する珠洲焼は極めて少なかった。本項では先ず弥生土器について述べたのち、それ以外の土器類についてとりあげることとしたい。

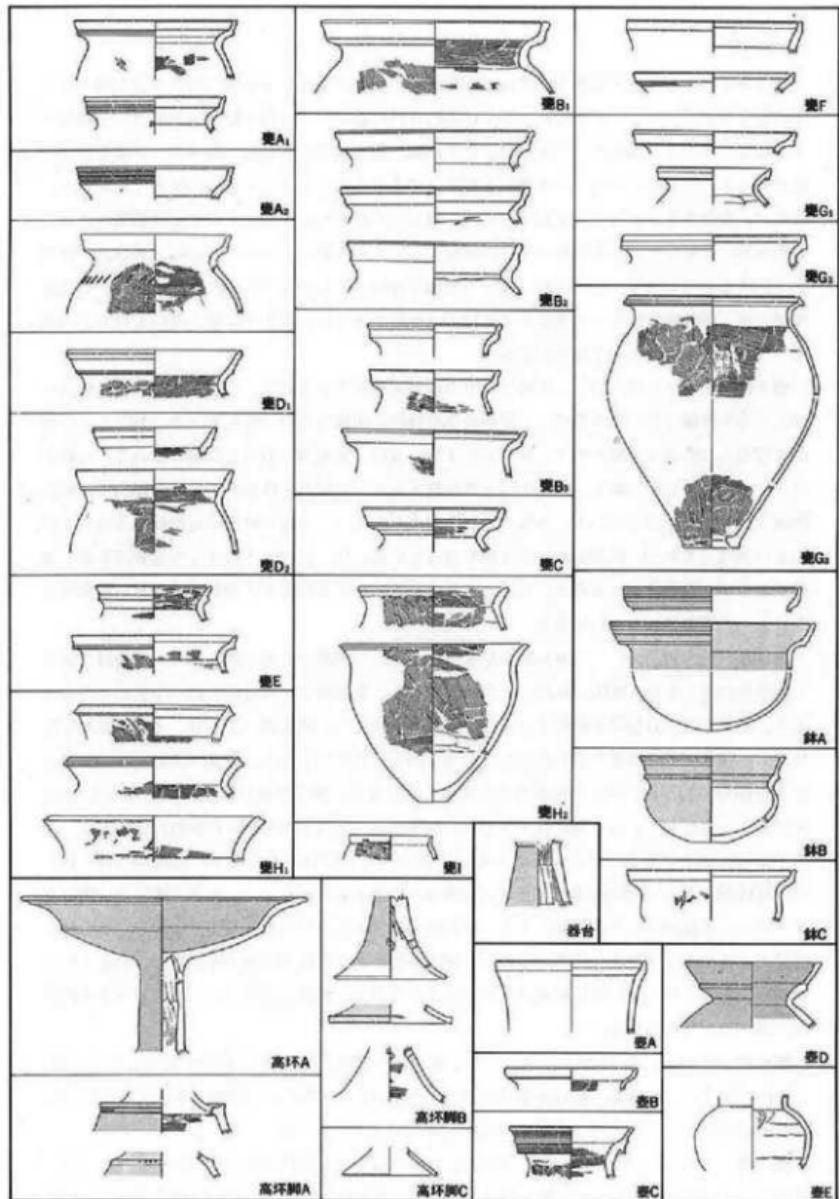
a) 弥生土器

西岩野遺跡から出土した弥生土器は、全て後期の所産と考えられ、第III層から出土した。出土量は、今回の調査では最も多く出土したが、絶対量としてはそれほど多くなく、コンテナに軽く4箱程であった。また完成品等の器形全体を窺える個体はほとんどなく、大半が口縁部を中心とした図上復元である。該期の資料は、県内においても多いとは言えないため、可能な限りの復元に努めたが、図化に多少の困難を伴ったものも少なくなかった。なお、個々の土器については、巻末に観察表を別掲したので参照されたい。

弥生土器の器種は、甕、壺、鉢、高杯、器台形土器の5種が認められた。各器種は、その形態から更に幾つかの器形に細分することができるが、第16図は、器形分類の大別と細別とを一覧表としてまとめたものである。但し、図化は、口縁部を中心にしてなされ、胴部の形態や底部の不明な個体が多いことから、分類は主に口縁部形態によって行った。また、絶対量が少ないことから、細別については最小限にとどめ、大枠を設定することを目的とした。なお、本項では、分類した器形毎に述べたい。

甕形土器

当該土器群に占める甕類の出土量は多く、全体の65%前後にも及び、器形分類数にても全22類中10類にのぼり、最もバラエティーに富む器種である。これら甕類は、口縁部形態を中心とした基本的な分類では、二重口縁のもの（A～E類）、二重口縁状を呈するもの（F～G類）、くの字口縁を呈するもの（H～J類）の3大別が可能である。しかし、胴部の形態あるいは、口縁部形態と結びつく底部の形態は、残念ながら当該土器群からは明確にできなかった。ただ底部については、全体に小径化傾向にあるものの直径は4cm前後であったようである。



第16圖 西岩野遺跡第Ⅲ層出土弦紋土器器形分類一覽 (1:6)

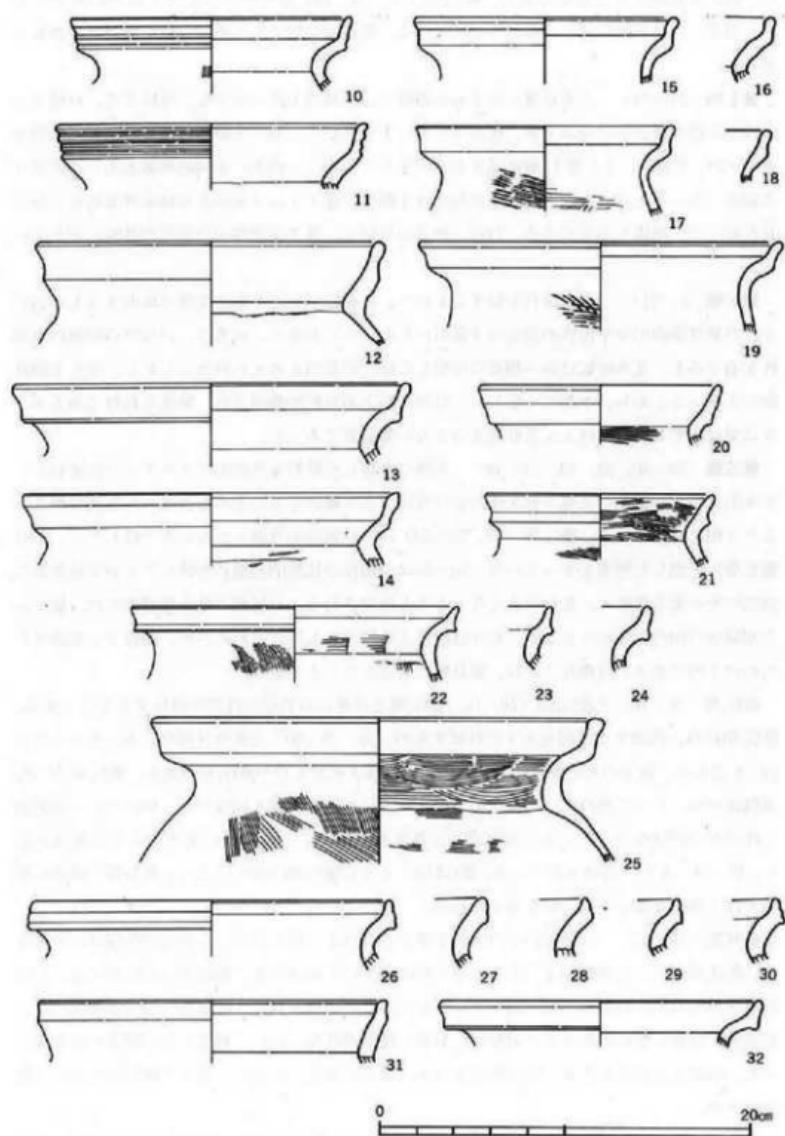
胎土は、ほとんど全てに径1~2mmの砂粒が認められ、径2~4mm程の砂粒を含む例も決して珍しくはなかった。これら砂粒の多くは器内外面に露出し、容易に観察が可能だが、磨滅による結果ではなく、当初からのものようである。胎土に含まれる混入物では、所謂石粒が主流であるが、これらの代わりに赤褐色土粒子（径1~5mm）を多く含む例が少なくなかった。焼成は、埋蔵条件によっても左右されるが、概して不良のものが多い。しかし沖積低地における土師器とは異なり、器面調整は十分に観察することが可能であった。色調は、黄橙色~橙褐色を呈するものが大半を占めるが、褐色~暗褐色を呈するものも少くない。調整は、口縁部を横ナデ、胸部内外面をハケ調整とする例が一般的であるが、横ナデを施さないものや、内面をヘラ削りするものも若干認められる。

甕A類（1~2、10~11） 明確な二重口縁形態を呈するもので、口縁部上段は、直線状を呈して若干外傾する。甕A類は、口縁屈曲部の稜線が明瞭なもの（甕A₁類-2、10）と、口縁部下段のくびれがやや緩やかで、稜線が若干甘いもの（甕A₂類-11）とに細分される。口唇部は、やや内削ぎ状に内傾し、端部が若干外反状となる。口縁部上段側面には、溝幅約3mm程の凹線文が1~3条巡っている。SX-50から出土した1は、二重口縁の接合部に1条巡らされ、他とは異なっており、凹線も幅が若干狭くなっている。10、11は、1に比しても胸部形態は明確でないが、肩のあまり張らないものと考えられる。口縁部は横ナデ調整が施され、胸部内外面ともハケ調整されるものである。

甕B類（12~19、25） 二重口縁を呈するが、それが明瞭なもの（甕B₁類）と、明瞭でなくくの字状に近いもの（甕B₂、B₃類）とに細分される。甕B類は、口縁部上段の中央がやや細くなり、屈曲部及び口唇部が肥厚することを特徴としている。甕B₁類（25）は、大形の器形を主体とし、頸部が若干筒状を呈したものである。25は、焼成が不良で、磨滅が著しいものであった。甕B₂類（12~14）は、口縁部がくの字状に近くなり、頸部内面に稜線をとどめるもので、中形品を主体としている。焼成は不良なものが多いが、その中でも14は比較的良好である。全て口縁部に横ナデを施すが、頸部以下をヘラ削りするのは14のみである。甕B₃類（15~19）は、甕B₂類に近い口縁部形態であるが、頸部のくびれが若干緩やかで、肩部の張らない器形を呈する。口唇部はやや外反を強くする。中形品（19）も少量認められるが、主体をなすのは小形品のようである。甕B₁、B₂類は、概して焼成が悪いが、甕B₃類は焼成が良好で、薄手といった傾向があり、胎土も比較的精選されているようである。甕類にあっては、甕B類が主体的器種であったと考えられる。

甕C類（51） 二重口縁を呈するもので、形態的には甕A₁類と甕B₂類の中間形とも言える。全体的に厚手で、口縁部上段は直線状を呈し、外傾が比較的強い。個体数は少なく、51の1点のみ確認されている。本例の外面には厚く炭化物が付着していた。

甕D類（3~4、20） 形態的にはくの字口縁に近いが、製作技法としては口縁部の上段と下段という2段階で構成され、緩い屈曲部外面には形骸化したような稜線が認められる。口縁部上段は比較的幅が広く、直線的に外傾している。甕D₁類（3）は、口唇部側面が若干肥厚



第17圖 西岩野遺跡第三層出土陶器 (I)

し、肩部が比較的張るものである。甕D₂類（4、20）は、口唇部がやや尖り気味の形態であり、肩部がナデ肩状を呈した器形となっている。甕D類に属する土器は、概して焼成が良好であった。

甕E類（21～24） 二重口縁を呈する土器群で、口縁部上段は短かく、外反する。口縁部の上段と下段の接合部は強調され、棱線が下方にややのびている。本類には甕B類に近い形態のもの（24）を含み、また甕I₁類に通ずる面があることから、両者の中間的形態あるいは関連する器形であったと言える。21はやや粗製的な土器で、横ナデは口唇部から口縁部外面に軽く施されたのみで、焼成も不良である。22は、焼成が良好で、横ナデ調整を口縁部外面に施している。

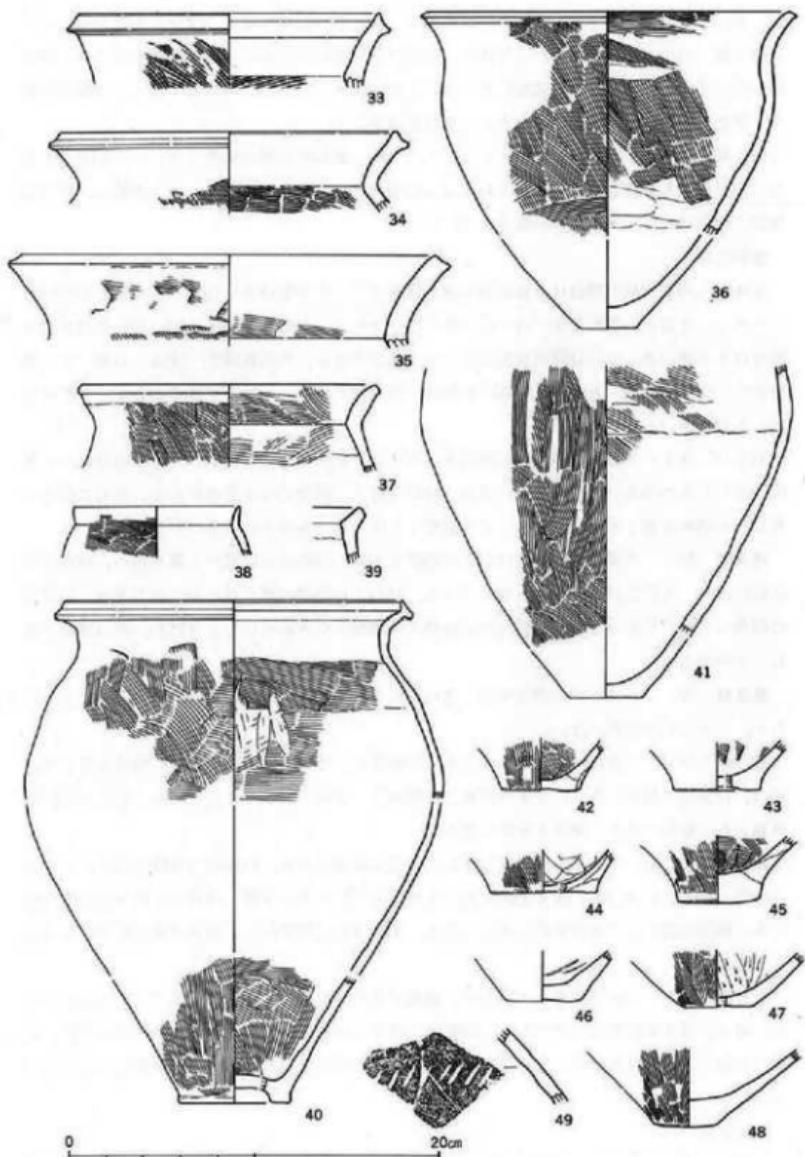
甕F類（5、31） 二重口縁状を呈するもので、口唇部が短かく直立気味に屈曲するもの（31）や、口唇部側面がやや幅広の面をなす器形のもの（5）がある。両者は、口唇部の形態に類似性を有するも、基本的には各々別途に分類したほうが妥当と考えられる。しかし、小片で個体数が少ないとから、本類に一括した。31は、胎土が比較的精選され、焼成も良好であるが、5は更に緻密な胎土でほとんど砂粒を含まない精製品であった。

甕G類（26～30、32、40、53～54） 本類に分類した器形も比較的バラエティーに富むが、基本的には、口縁部の先端が粘土帯の貼付等によって幅広くしたものである。口唇部の傾きにより3類に分類される。甕G₁類（32、53～54）は、口唇部が外傾したものを一括したが、32は甕E類に近似した形態をとっている。53～54は、頸部が比較的明瞭に屈曲したくの字状を呈し、肩部のやや張る器形で、壺形に近くなるものと推定される。口唇部の粘土帯側面には、緩やかな凹線状の凹凸が認められるが、製作技法による結果とも考えられるため、凹線文と意識されたかは不明である。同様なことは、甕D類にも言えることである。

甕G₂類（26～30）と甕G₃類（40）は、甕G₁類とは逆に口唇部の端部が内傾するものである。甕G₂類には、内傾する端部を上下に伸ばすもの（26、29～30）とあまり強調しないもの（27～28）があるが、前者のそれを更に強調し、強く内傾させたものが甕G₃類である。甕G₂類の口唇部側面には、1～2条の浅い凹線文が巡らされている。甕G₃類も同様だが、40については側面全体が浅い凹状を呈している。40は薄手で焼成も良好だが、甕G₃類に属する大半は焼成が悪く、粉っぽいもので占められている。甕G類は、とくに甕G₂類を中心として、甕B類と同様に甕類では主体的な器形であったと考えられる。

甕H類（33～37） 口縁部がくの字状を呈するものを一括したが、口唇部が凹線状に凹むもの（甕H₁類）と、角状断面を呈するもの（甕H₂類）に大別される。甕H₁類（33～35）は、比較的厚手のもので、中形品（33～34）と大形品（35）に区分される。前者の口唇部は強調され、形態的には甕E類に近似する。調整は、34が口縁部内外面、33は口唇部から口縁部外面を横ナデし、焼成も良好であるが、35は焼成不良で、磨滅が著しいもので、横ナデ調整はほとんど觀察できない。

甕H₂類（36～37）は、全体的に粗製的な土器で、口縁部の横ナデ調整はほとんど施されな



第18図 西岩野遺跡第Ⅲ層出土器物 (2)

い。36は、胴部形態まである程度復元されたが、口径が胴部径を凌ぎ、深鉢形を呈している。

甕I類 (38) 口縁部が短く屈曲し、やや直立気味に立上がるくの字口縁を呈する。薄手の小形土器で、胴部の形態は球形に近いものと推定される。38は、焼成も不良で、口縁部に横ナデ調整を施さない粗製的土器である。個体数は少ない。

甕J類 (39) 小片資料しか出土しなかったため、器形の特徴は明確でないが、胴部の張らない小鉢形にも類似したものと考えられる。口縁部はくの字状を呈する。39の調整は、内外面粗雑で擦痕に近いミガキ調整が施されている。

壺形土器

全体に占める壺類の割合は、概ね10%強と推定され、出土量は多くない。しかし、器形はバラエティーに富み、器形分類では一応5類に区分される。ただし1個体1類に近い状況にあり、細分是不可能であった。口縁部形態によって大区分すると、所謂長頸壺（壺A～B類）と二重口縁壺（壺C～D類）となる。胴部の形態は、復元資料がないため不明確であるが、球形状に近いものが多いと考えられる。

胎土は、径1～3mm程の砂粒が比較的多く含まれ、壺類と大差ないが、一応に精選され、焼成の良好なものが多い。壺類では、所謂一般的な壺と、精製的な小形壺があり、前者は横ナデ及びハケ調整を施すが、後者ではミガキ調整を主体とし、朱彩されるものが多い。

壺A類 (55) 所謂長頸壺と呼ばれる後期弥生土器に特徴的な形態の土器である。頸部径は比較的大きく、大形品に近いものと考えられる。55は、口縁部が緩く外反して立上がり、口唇部は屈曲して直立気味となる。口唇部付近は横ナデ調整がなされているようだが、他は器面が荒れて不明である。

壺B類 (52) 口縁部が内擭気味の二重口縁状を呈するもので、長頸壺の一種とも考えられるが、小片のため明確でない。

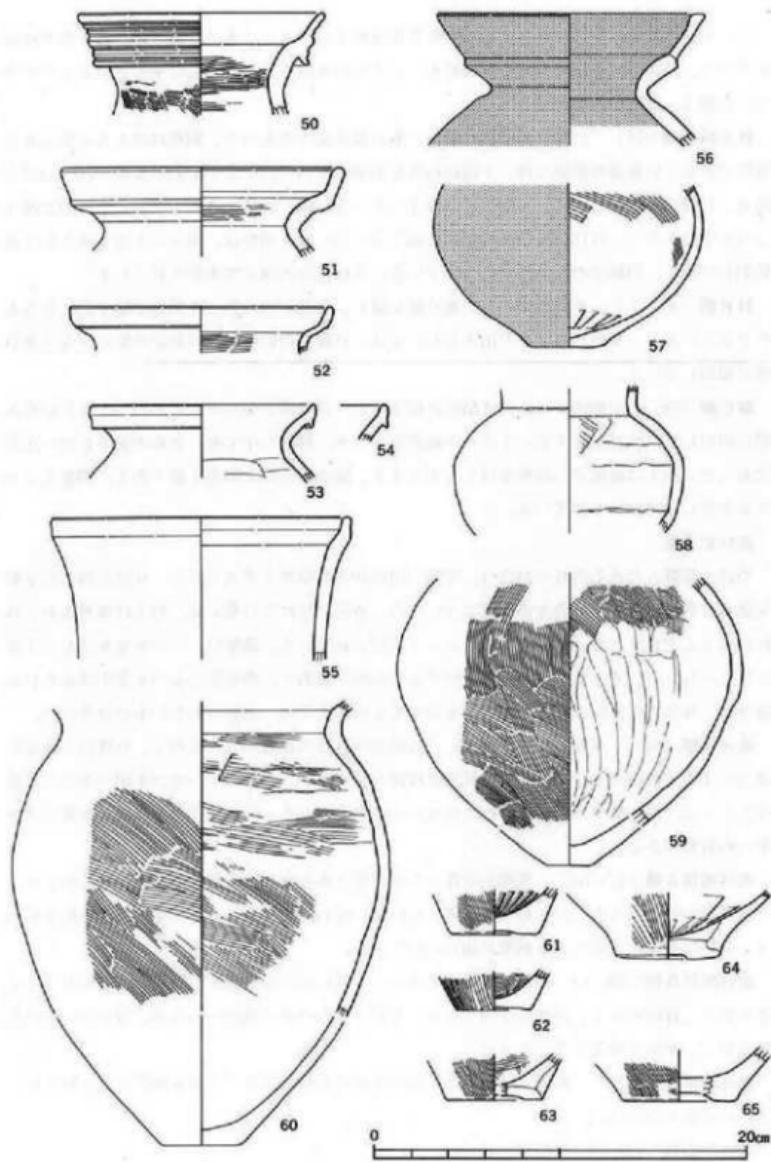
壺C類 (50) 二重口縁を呈する壺である。頸部は、比較的大きく、若干長い筒状を呈する。50は、口縁部の側面が広く、5条の凹線文（溝幅3～4mm）が巡らされている。胎土は比較的精選されて緻密であり、焼成も良好である。

壺D類 (56, 57) 胴部が球形を呈した二重口縁壺である。口縁部の外傾は強く、やや広口形態となる。口縁部の上段も下段も各々上端部を肥厚させ、全体では若干内擭気味となっている。胴部は57のような球形状と考えられる。朱彩された精製品で、胎土や焼成も良好な土器である。

壺E類 (58) 口縁部形態は不明だが、頸部が筒形を呈し、胴部は球形を呈するものである。58は、若干粗製的な土器である。調整は、外面では頸部から胴部上半にかけては継位、脛部は右斜位、下半は横位のミガキ調整、内面は頸部が継位、胴部は横位のナデ調整が施されている。

鉢形土器

鉢類の出土量は少なく、全体の10%に満たないものと推定される。個体数が少ないとこ



第19圖 西岩野遺跡第四層出土陶器 (3)

って、形態分類数は少ないが、ある程度形式化されていたようである。胎土は、含まれる砂粒も少なく、精選されて緻密である。調整も、ミガキが多用されるとともに朱彩されるものが多い。色調は、黄橙色が多い。

鉢A類（76～77） 口縁部が受口に近い二重口縁を呈するもので、胴部はほとんど張らない器形である。口縁部の形態では、下段部の外反が強いもの（77）とやや弱いもの（76）の別がある。口縁部上段側面には、4条ほど四線文（3～5mm幅）が施文されている。全体的に薄手となるものが多く、77は器厚の平均が約4mmとなっている。調整は、横ミガキを主体として比較的密に施し、四線文の文様帯にも及んでいる。外面及び内面まで朱彩されている。

鉢B類（6、7） やや緩やかな二重口縁を呈し、肩部が強く張って胴部が扁平状となるものである。SX-50内から2点が出土した。6は、口縁部の形態が、口唇部の脹らみなど壺D類に類似している。

鉢C類（78） 形態的には、鉢A類に近似するが、口縁部が短かく、どちらかといえば壺A類に類似した口縁部を有する。1点のみ確認されたが、鉢類の中で唯一朱彩の施されない土器であった。胎土は緻密で、砂粒をほとんど含まず、焼成も良好な精製土器である。調整もミガキを多用し丁寧に仕上げている。

高环形土器

当該土器群に占める高環の割合は、壺類と同様10%強程度と考えられる。環部と脚部の全形を窺える資料はなく、組合せが明確でないため、各部に分けて分類した。胎土は精選され、砂粒はほとんど含まれない緻密な素地によって製作されている。調整は、ミガキを多用し、丁寧に仕上げられている。色調は、橙色を呈するものが一般的で、黒色系のものも多少認められる。高環は、環部の内外面、脚部の外面を朱彩するものが大半で、朱彩されないものは少ない。

高环A類（66） 环部は口径が大きく、口縁部の外反が比較的強いもので、口縁部と体部の高さは1:1の割合となっている。脚部は棒状を呈するが、裾部については不明である。可能性としては、高环脚部A類が伴うのではないかと考えられる。66は、环部の形態を把握できる唯一の資料である。

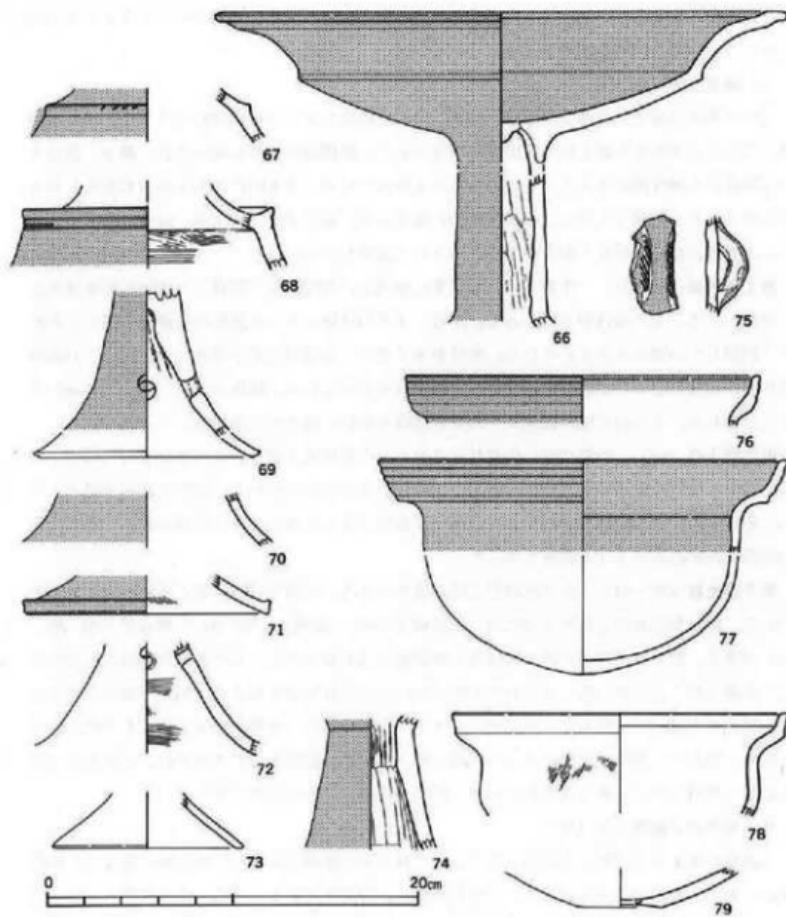
高环脚部A類（67～68） 補部が有段となる形態であるが、上半部は棒状となるものとロート状に裾が広がるものとが存在すると考えられる。67は、有段部に2～3条の細沈線状文が巡り、68には櫛歯状工具による刺突が加えられている。

高环脚部B類（69、71～72） 脚部全体がロート状に広がる形態を一括した。破片のため全体を窺える資料がなく、詳細は不明である。朱彩されるのが一般的であるが、72については黒色を呈し、朱彩を確認できなかった。

高环脚部C類（73） 補部がロート状に開く小形のものである。ミガキ調整が施されるが、朱彩はされていない。

器台形土器（70、74、図版16-a, b）

器台の出土量は少なく、全体の数%を占めるのみである。完形品は勿論、全形を窺える資料



第20図 西岩野遺跡第四層出土赤土器 (4)

はなかった。このため、器形分類をせず、一括して述べることとする。調整や胎土及び色調等は、概ね高环と同様であった。70と図版16-aは接合し、裾部が折返し状を呈した有段となっている。74は、裾部がロート状に開くもので、焼成は不良であった。

その他の土器類

把手部 (75) 高环等に伴うものと考えられ、内面の輪積痕を横ナデで調整している。

胴部 (41, 49, 59, 60) 41, 49, 60は甌類、60は壺の胴部である。

底部（42～48、61～65、79）79が鉢類に含まれる他は、甕類と壺類に伴うと考えられるが、明確でない。45、64～65は壺類と考えられる。

b) 繩文土器（第21図）

今回の調査で出土した繩文土器は、総数でも50片に満たない小破片資料であった。出土層位は、ほとんどが弥生土器と同じ第III層から出土した。第III層は3層に細分され、繩文土器はその下層位から層位的に出土したものもあるかも知れないが、基本的には弥生時代に混入したものと考えられる。繩文土器は、中期と後期に属するが、前者を第1群土器、後者を第2群土器とし、両者に属する粗製土器を第3群土器として説明したい。

第1群土器（80～81）中期中葉でも後半に相当し、岩野遺跡（関ほか 1980）で主体的な土器群である。全て深鉢形土器である。80は、2本の沈線によって縦位の隆線を作出し、左振り（撲戻し）の縄文を施文している。砂粒を多く含み、金雲母が若干含まれる。81は、口縁部破片で、頸部に2本の沈線が巡っている。砂粒は含まれないが、橙色の土粒（径2～3mm）が多く含まれる。この他に貼付隆線に矢羽状の沈線を縦位に施すものがある。

第2群土器（95）後期初頭に位置付けされる三十稻場式土器で、出土量は少なく数点である。頸部に橋状把手を4単位付す。胎土には砂粒が含まれない代わりに橙色土粒が少量含まれる。褐色を呈する。口頸部から内面は、棒状工具等によって荒いミガキが施される。橋状把手の陰部は成形段階のまま未調整であった。

第3群土器（82～94）全て深鉢形土器の破片である。文様では繩文類と条線文類とに区分される。繩文類の施文されるものには、羽状縄文（82）、斜縄文（83～85）、撲糸文（86～89、91）がある。85の無節縄文や撲糸文はR、単節縄文はL Rであり、LやR Lは認められなかった。条線文類としては、荒くまくれたもの（90）とハケ状を呈するもの（94）がある。底部では、網代底が認められるもの（92～93）が多い。色調は橙色～橙褐色を呈するものがほとんどである。胎土は、砂粒が含まれるもの（82、87、89）が少量認められるほかは、岩粒あるいは土粒状の軟質な粒子が多く含まれていた。83には両者のものが含まれている。

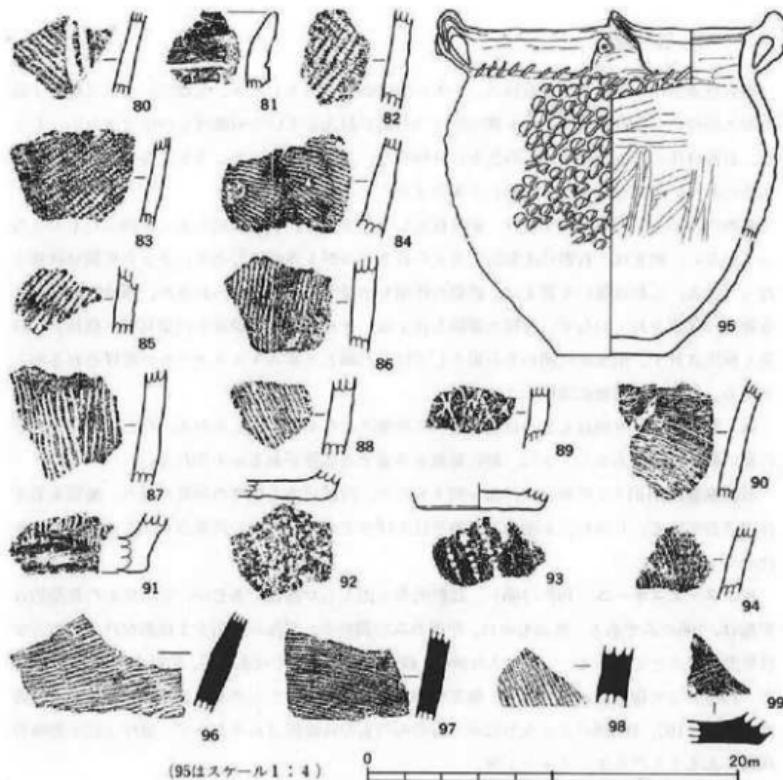
c) 中世の土器類（第21図）

当該期に属する土器類は非常に少なく、全て珠洲系の硬陶であった。96～98は甕片で、99は擂鉢である。前者のタタキ目痕は、全体に細かく、時期的に新しいものようである。96～97は、SD-53溝址覆土上層から出土した。

d) 近世の陶磁器類（図版19～20）

本稿では、一応18世紀から幕末に至る時期の陶磁器類を対象とした。出土量としては多くなく、100片程の小片が出土したのみである。層位的には、第II層上層部（=第IIa層）～第I層からの出土であるが、第Ic層～第IIa層に集中している。生産地としては肥前系が90%以上の半を占め、極少量の越中瀬戸や京焼風の陶器が出土したのみである。

唐津（図版19）陶磁器類の6割強を占める。層位では、第II層出土が大半で、次いで第Ic層出土が多く、全体の8割前後に達する。器類は、皿、碗類がほとんどで、甕や鉢、壺は少



第21図 西岩野遺跡出土開文土器及び中世土器類

ない。大半が唐津Ⅰ期～Ⅱ期に統するもので、17世紀後半～18世紀のもの（140～143）は少ない。142～142は、銅錆釉が施され、内野山蒸製と考えられる。

伊万里（図版20～146～156） 陶磁器類の3割程度を占める。層位では、第Ⅰc層を中心とした第Ⅰ層出土が大半である。器種は、碗や皿類がほとんどで、徳利（154）が少量存在する。18世紀代の所産とされるものが大半で、19世紀代に降る可能性を有するものが少量認められる。第Ⅰc層上面に検出された遺構群の時代を示唆するものと推定される。

越中瀬戸（図版20～157～158） 壺、壺類のみ出土した。18世紀代の所産と考えられる。157は、第Ⅰ層が厚く堆積した北斜面のA-3グリッドにおいて、表砂の中層位（≈第Ⅰb層）から出土した。

京焼風陶器 図示しなかったが数点出土した。肥前系の可能性もあるが確認できなかった。

2 石器類

西岩野遺跡から出土した石器類は、大半が第III層から出土したが、土器類における縄文土器の混入同様に、石器類においても縄文時代の石器が混入している可能性を否定できない。しかし、石器自体の属性だけでは、時代別に分類することが困難なため、大半を弥生時代の石器で占められているものとして、一括して報告することとした。

遺物に占める石器類の出土量は、絶対数にても少なく、石器組成の全てが揃ったものとなっていない。例えば、石鎌は未製品と考えられるものが1点のみであり、また石斧類は皆無となっている。これは強いて言えば、鉄器の使用を示唆するとも考えられるが、積極的に推進する資料は確認されておらず、今後の課題と言える。また、農耕に関連した道具類（農耕具）は全く検出されず、生業面に関わる石器としては、石鎌とビエス・エスキューが掲げられるのみである。以下、器種毎に説明していきたい。

石匙 (100) 欠損品もしくは製作途中に放棄されたものと考えられる。但し、石材が粒子の粗い凝灰岩系であることから、別の器種を考慮する必要があるかも知れない。

石鎌未製品 (101) 片面に自然面を残すもので、両側はある程度の調整が進み、基部も若干作出されている。しかし、先端部の調整や仕上げまでには至らずに放棄されたものである。灰色のチャート製。

ビエス・エスキュー (102~106) 比較的多く出土した器種であるが、定形化した典型的な形態は、106のみである。他のものは、片面のみの調整や、刃部の作出を1側面だけとし他方を自然面のままとしている。このような例は、縄文時代後期例ではあるが、柏崎市小丸山遺跡(伊藤 1985)でも指摘されたとおり、機能や用途は同じであったと考えられる。但し、小丸山遺跡例には、103、105例のような刃部が一方のみのものは検出されておらず、製作工程が簡略化傾向にあるとも言える。チャート製。

石鎌 (107~108) 2点が検出されたが、全て安山岩製であった。107は、上、下方とも両面から調整を加えているが、108は片面のみで、完成品ではない可能性もある。

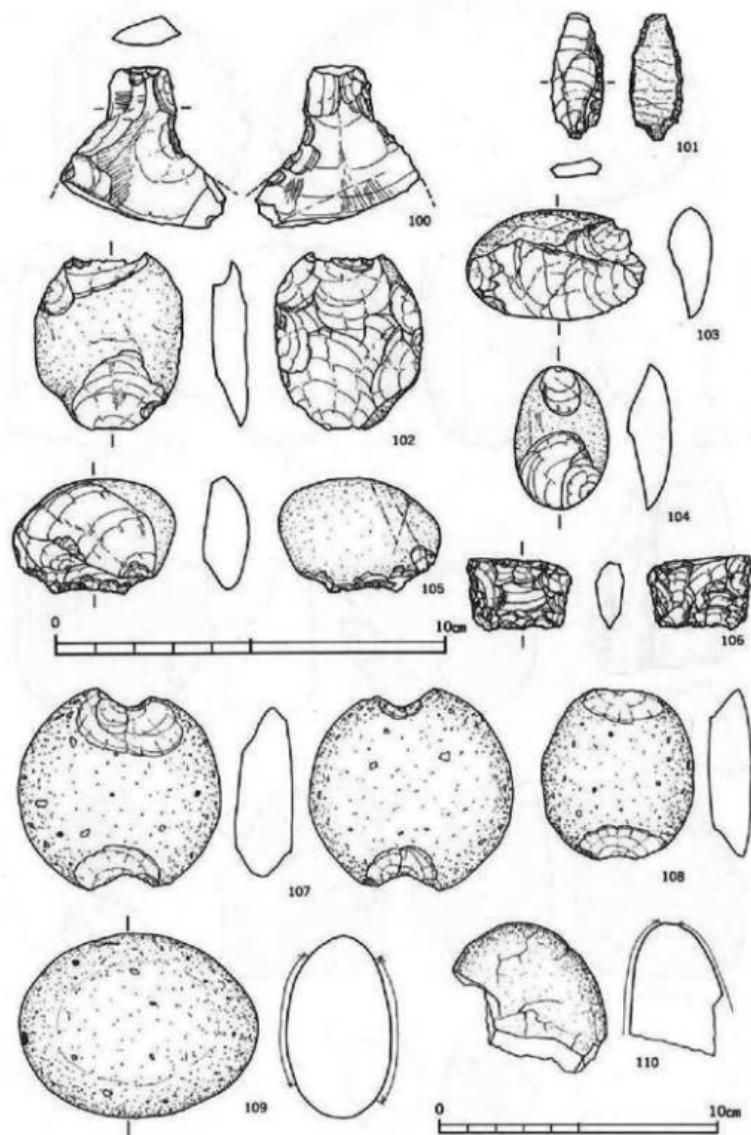
磨石 (109~112) 表裏の平坦面を使用したもの (109~110) と側縁の全周を使用するもの (112)、端部のみのもの (111) とがあり、各々用途が異なっていたと考えられる。

石皿 (113) 残欠。安山岩製。焼けたためか一部赤色を呈する。

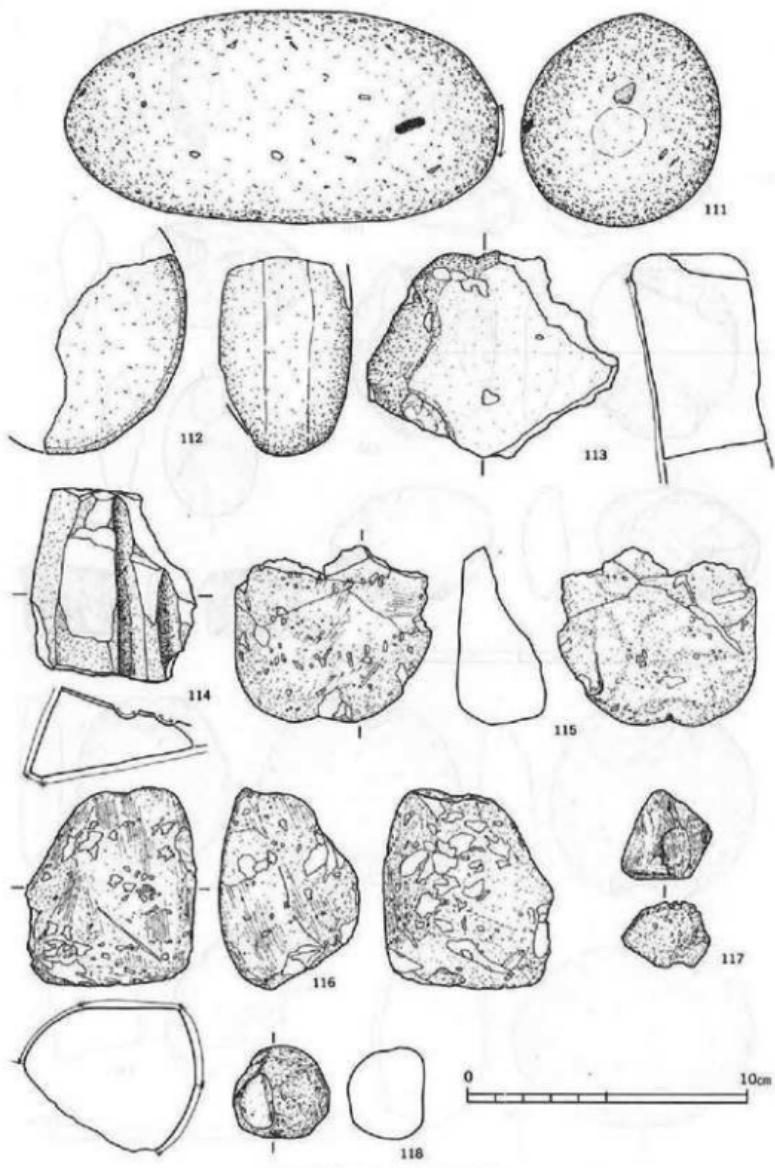
筋砥石 (114) 残欠のため、2本の筋しか確認できない。砂岩製。側面や裏面も砥石として利用されている。

輕石 (115~118) 輕石による石器は、全て研磨度を有するもので、任意に使用したためか全体が不定形で、規則性がない。

碧玉網片 (図版17-h~i) 点数は少ないが、碧玉片が2点出土している。前述したS X-50出土のヒスイ類似の原石等とともに、玉造りの存在を示唆するものである。筋砥石の出土は、その傍証ともなり得るが、今後の課題である。



第22圖 西岩野遺跡出土石器類 (I)

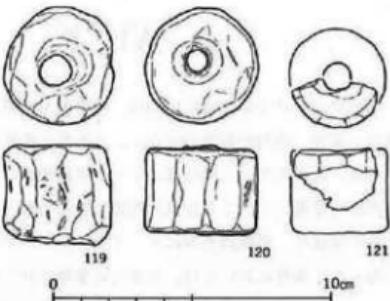


第23図 西岩野遺跡出土石器類 (2)

3 土 製 品

土製品としては、土錘 3 点が出土した。121は残欠であるが、他は完存品である。胎土には、砂粒が若干含まれるが、量的には多くない。色調は、119、121がにぶい黄橙色、120は橙色を呈する。成形は手捏状が主体と考えられるが、120は平板な台の上で回転させて側縁を整形したらしく、平滑で、形も整っている。

119、120は、E-4⑦グリッド出土で、SI-60住居址に伴っていたものと考えられる。



第24図 土 製 品

4 古 錢

本遺跡から出土した古銭は、合計 7 枚であるが、このうち 6 枚が SK-51 土壙内から出土したものである。122~127 がそれらで、組状のもので結ばれていた。土壙は墓址的性格を有し、供養に供された六道銭と考えられ、古銭は全て北宋銭で占められていた。

出土古銭は、全て中国からの渡来銭とみられるが、渡来銭そのままとは考えにくい。渡来銭と併用して用いられたものに、国内で私鋳された粗悪な錢貨が多くあった。本遺跡出土の古銭も、文字がつぶれて判読が困難なものや、気孔が目立つ醜いもので占められるところから、全て所謂ビタ銭と考えられる。

番号	名 称	初鑄国	初鑄年代	出土位置
122	祥符元宝	北宋	大中祥符元年 (1008)	
123	皇宋通宝	北宋	宋元 2 年 (1039)	
124	熙寧元宝	北宋	熙寧元年 (1068)	SK-51
125	元符通宝	北宋	元符元年 (1098)	
126	政和通宝	北宋	政和元年 (1111)	
128	永樂通寶	明	永樂 6 年 (1408)	表様



第25図 古 錢 (1 : 1)

VI 総括

新潟県における弥生時代後期は、遺跡数も他県に比して多くではなく、また遺構の検出例や遺物出土量等、絶対的数量が少なく、土器群の編年作業も容易でないというのが現状であった。しかし、近年に至って周辺部、とくに北陸地方における当該期の研究に幾つかの進展があり、土器群の変遷についても比較的明瞭になってきている。柏崎平野においても、柏崎市史による資料の集成や、発掘調査等によって不十分ではあるが、ある程度の様相を把握することが可能となった。本章においては、今までに集積された成果を基に、柏崎平野における弥生時代後期について概観し、西岩野遺跡における当該期の成果についてまとめてみたい。

1 柏崎平野における弥生時代後期

本県における当該期の研究は、昭和57年に実施された西山町内越遺跡の調査以前と以後とに概ね区分することができる。内越以前は、弥生時代後期あるいは後期弥生土器という概念がやや莫然とした感があり、以後は問題点の整理が進み、後期弥生土器の認識も時代区分とともにある程度具体的に論議されるようになった段階と言うことができる。これは、北陸地方の研究段階と正比例の関係にあるが、県内の当該期が弥生時代後期として論議されるようになった初めてとも言うべき段階である。最近に至り、西岩野遺跡のほかに長岡市横山遺跡（駒形ほか 1986）、糸魚川市後生山遺跡（大森 1986）等で多くの資料が検出されていることから、当該期研究は、現在がその転換期たるべき時期とができるだろう。

研究略歴 柏崎平野において、初めて当該期の土器群が検出されたのは、昭和27年に調査された刈羽村刈羽貝塚（八幡 1958）においてである。しかし、当時は古式土師器と認識されるとともに、調査の主眼が縄文時代前期の貝塚にあり、遺構も検出されないこともあって土器類の一部を説明なしで掲載したにとどまっている。その後、昭和49年に調査された柏崎市岩野遺跡（関ほか 1980）においても当該期の土器類を少量検出したが、遺跡の主体が縄文時代中期の集落にあり、客体的存在として報告されたのみであった。但し、当該土器群を新潟市六地山遺跡や金井町千種遺跡の出土土器群との対比がなされ、「時期的には佐渡千種式と対比すべきであろう」として、編年的位置付けを試みている。しかし、遺構は未検出であり、出土した土器類も絶対量が少なく、論議を高めるにも資料不足であった。

当地域で初めて遺構が検出されたのは、西山町内越遺跡（横山ほか 1983）である。住居址1棟のほか土坑等が検出され、出土した遺物も比較的まとまっていた。土器群は、所謂北陸系で占められるが、極少量の縄繩文土器（後北C₁式）が住居址内から出土したとして注目されている。報告書では、これら遺構、遺物のほかに、佐渡を除く新潟県全域を対象とした土器編年案が提示され、内越遺跡出土土器群の編年的位置付けがなされたことは画期的であった。その後六地山遺跡出土土器群を前半から中葉前後に繰り上げる修正（坂井 1985）がなされたが、

県内における当該期の編年的大枠が設定されている。

柏崎平野の位置付け 柏崎平野は、刈羽平野とも称される小規模な臨海沖積平野である。古代においては越中国に属し、古志郡にも含まれたことのある三崎郡の中心部と推定されている。この平野は、南西に米山山塊を隔てて高田平野を中心とする頸城地方があり、北東には低丘陵の遠くに潟原地帯、南東は魚沼地方に接している。柏崎平野は、地理的に観ればこれら3地方の接点であり、また文化面でも同様なことが取扱い、文化の伝播経路であったとも考えられる。弥生時代中期後半における北陸系櫛描文土器群と信州栗林系土器群の共存や、山草荷式土器分布の西限などはその実例である。当地域は、前述3地方と比しても小規模ではあるが、地域的特性があり、小地域として設定可能と考えられる。

遺跡の時期 柏崎平野における当該期の遺跡について、おおよその時期区分を試みたのが右下表である。区分には若干の無理を伴うが、前半期を後期初頭から六地山期併行、後半は北陸地方の法仏式期、終末期を一応月影式期に併行させておく。但し、発掘調査が実施され、遺物がある程度出土したのは、西岩野遺跡の他内越遺跡、刈羽大平遺跡の3遺跡だけであり、他の遺跡では数点のみという例もあって、厳密でない部分もあるが、現状での判断としておきたい。表によれば、前半期がほとんど不明という状況にあるとともに、終末期についても遺跡数や遺物量が少なく、前半期と同様明瞭さに欠けている。その反面後半期の遺跡は、7カ所を数え、本地域における後期の遺跡中半数以上を占めている。立地を観ると、台地上に占地されている場合が多く、このため発見、確認されやすいということを示唆しているのかも知れない。

遺跡の分布と立地 柏崎平野における弥生時代後期の遺跡は、柏崎市史によって周辺地域の資料も集成されかなり明確になりつつある。現在確認された遺跡は、柏崎市域8遺跡、刈羽村3遺跡、西山町2遺跡の計13遺跡である。これらのうち半数以上は、柏崎市域に所在するが、出典が柏崎市史を中心としたことの当然もある。しかし、刈羽村から西山町へと別山川の上流に行くほど、沖積地が乏しくなることから、これに比例する可能性もある。遺跡の分布図は紙数の関係で掲載できなかつたが、鶴川流域の遺跡は刈

番号	遺跡名	行政区画	立 地	時 期		
				前半	後半	終末
1	岩野	柏崎市	台 地		○	
2	西岩野		台 地		○	
3	闕野		沖 積 地		○	
4	小丸山		砂丘(低湿地)	(○)		(○)
5	剣野A		台 地			
6	戸口B		沖 積 地		(○)	
7	開運橋		沖 積 地			
8	鶴巻田		沖 積 地			(○)
9	刈羽大平	刈羽村	砂丘(湿地性の高台)		○	
10	刈羽貝塚		台 地		○	
11	西 谷		沖 積 地			○
12	野 峠		台 地			○
13	内 越	西山町	台 地		○	

遺跡の名称及び立地並びに時期の概略

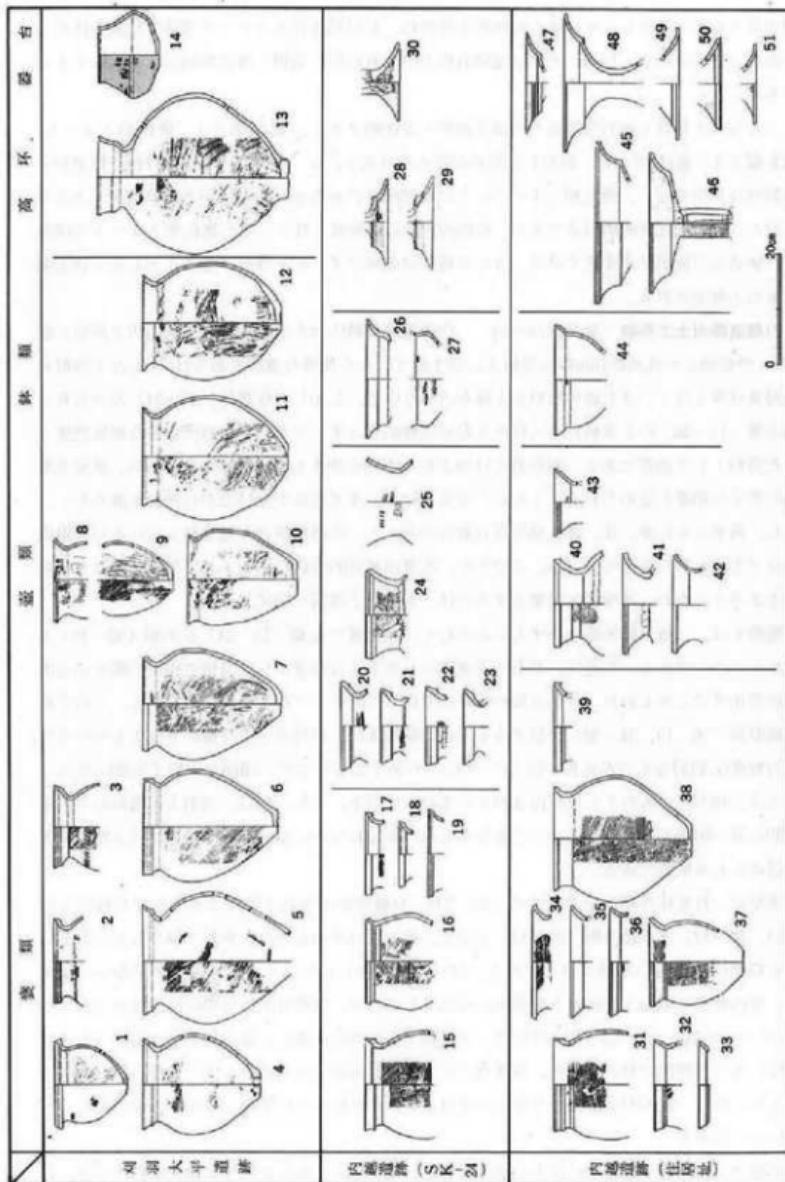
野A遺跡と鶴巻田遺跡のみであり、砂丘に立地する2遺跡を除くと鯖石川下流域から別山川流域に他の全てが分布する。この分布は、分布調査の密度にも関わる現象的なものだが、それでもかなり特徴的な分布と言える。鶴川流域は、鯖石川流域よりも標高差で数m低いことから、鶴川の氾濫が激しく沖積地の利用が限定されたためとも考えられるが、今後更に検討する必要があるだろう。

立地としては、特殊な砂丘地を除くと、台地あるいは尾根筋上に営まれた遺跡6カ所、沖積地に営まれた遺跡5カ所となる。後者のうち、遺物の出土量がやまとまっている遺跡は、関野遺跡と西谷遺跡程度で、今後期待される戸口遺跡B地区を除く他の遺跡は、遺物量が少なく散発的で、実態は不明である。なお、関野遺跡は、当該期以降概ね古墳時代全般の遺物が出土しており、中核的集落が存在した可能性がある。前者の台地上に営まれる遺跡は、周辺の沖積地との標高差が10~20m前後と、それほど高台というわけではなく、短絡的に防塞的高地性集落とすることは危険で、畑作や狩猟・採集等に比重が高い集落であった可能性を考慮する必要はあるだろう。しかし、沖積地に立地する遺跡の内容が明確でなく、また台地上等の高台に立地する遺跡が、後期後半から終末期にかけて多く、前後する時期に顕著でないことも事実である。内越遺跡の場合は、特に防塞的施設は検出されず、面積的にも小規模で数軒程度の集落であったと推定される。しかし、西岩野遺跡は、台地平坦部がかなり広く、時期は不詳であるが大溝が検出され、内越遺跡とはかなり異った性格の可能性がある。いずれにせよ、今後の調査・研究に待つ面が多く、周辺地域からも類例を期待したい。

2 西岩野遺跡出土後期弥生土器群について

本遺跡から出土した当該土器群は、大半が遺構に伴わず、一括性が乏しい土器群である。しかし、個々の土器における特徴には、概ね共通した要素を見出すことができ、出土状況からも短期間の所産と考えられる土器群と言える。ただし、S X-50出土土器群は、少量ではあるが他の主体的土器群とは異った様相が看取され、層位的にも包含量の上層で検出されており、時期的に若干新しい要素を含んだ土器群と言えそうである。しかしながら、本遺跡から出土した土器群は絶対量が少なく、また破片資料が主体であるため、時期的に概ね併行関係にあると考えられる刈羽大平遺跡及び内越遺跡から出土した土器群との比較・検討を通して、当該土器群の特徴や編年的位置付けについて若干述べてみたい。

刈羽大平遺跡出土土器群（第26図1~14） 刈羽大平遺跡（品田ほか 1985b）は、荒浜砂丘北部北西向斜面の高台（標高15~25m）に営まれていた遺跡である。当該期の土器群は、自然流水路に堆積した泥炭状覆土（砂）上層から出土した。出土土器群の組成は、砂丘内という特殊性を反映して罐類が大半を占め、しかも完存品が多かった。一括性の強い主体的土器群は、4~6、8~9、14であり、他の土器群は若干地点を異にしている。これらのうち11~12は、胴部形態等に新しい要素が見受けられ、13もこれらに比較的近い時期のものと推定される。また1~3については、石川県法仏遺跡A群土器（谷内尾 1983）等に類例が認められ、やや古



第26図 柏崎平野における主な後期発生土器 (1 : 10)

相を呈するようである。その他の主体的土器群は、石川県鹿首モリガフチ遺跡T18調査区出土土器群（谷内尾ほか 1984）や法仏遺跡B群土器（谷内尾 前掲）等に類例が認められるものである。

これらの土器群と西岩野遺跡の当該土器群とを比較すると、甕A₂類と3、甕B₂類と4～5、甕E類と1、甕H₂類と8に類似した関係が認められるが、6～7、14については西岩野遺跡では類例は見出せない。甕E類と1については類似関係にあるとしても、前者が粗製的であるのに対し、後者は比較的精製品であり、短絡的比較には無理を伴う。また甕B₂類と4～5の関係も、後者の口縁部がやや長く伸び、5の口唇部は肥厚せずにやや外反することから若干後出的なものと推定される。

内越遺跡出土土器群（第26図15～51） 内越遺跡（横山ほか 1983）は、別山川上流域に位置し、沖積地との比高差15m程の尾根上に営まれていた小規模な遺跡である。出土した土器群の絶対量は多くなく、また破片資料が主体を占めている。しかし、住居址（31～51）及びSK-24土壤（15～30）の2遺構に各々伴う土器が比較的まとまっており、一括性がある程度把握された資料として重要である。報告書では両者を一時期の所産として取扱っているが、組成や形態に若干の相違が認められることから、本項ではひとまず両者を分けながら検討を進めたい。但し、両者ともに甕、壺、鉢、高杯及び器台があり、一応最低限の外見を整えているが、組成の全てを満たしたものではない。このため、両者が補完的関係にあるとして理解することも可能であろう。なお、本項にて対象とするのは、上述の2遺構に限定した。

甕類では、二重口縁形態をなすものが少なく、報告書でA₂類（15、31）とA₃類（32～33）としたもののみである。前者は、刈羽大平遺跡の6のような形態から、31例の頸部が緩やかな形態に変化するとおもわれ、月影式期には更に変化した同タイプのものが認められる。くの字状口縁形態（16～19、34～39）を呈するものは比較的多い。口唇部がやや幅広となるもののうち、西岩野甕G₁類的なものがSK-24（17～19）から出土しているが、端面の内傾する甕G₂類については、16が近いものとして検出されているのみである。また、16は、刈羽大平遺跡の7に系統的に近い関係が認められ、38へと連なるものかも知れない。34～35は、古墳時代前期にも多く認められる形態である。

壺類は、折返状口縁を呈するもの（20～23）、口縁部がやや長く外反するくの字口縁のもの（24、40～42）と長頸壺類（25、43）がある。折返状口縁のものは、SK-24のみから出土し、西岩野甕D₂類に近い形態である。但し、西岩野例は甕としたように頸部の折曲が弱い。類例は、富山県南太閤山1遺跡や上野遺跡から出土しており、塙崎II式併行期に位置付けられている（久々 1984）。24、40～42の形態は、中期後半には既に出現し、富山県江上A遺跡（久々 1982）等でも類例が見い出せる。長頸壺では、24が北陸地方の当該期にはよく見られるものであるが、43は一般的の形態と異なり類例が見出せず、住居址からは明確な長頸壺は確認されていないことになる。

鉢類は、両遺構から異った器形の個体が出土しているが、富山県内では類例が見当らず、石

川県奥原遺跡2住（石川考古研 1986）に両方の類例が出土し、ともに塙崎II（古）式併行期に編年されている（土肥ほか 1984）。

高坏及び器台は、区分に困難を伴う場合が多い。高坏では、45の口唇部に一条の凹線文が巡らされている。類似した文様は、SK-24にはないが、住居址からは壺（36～37）や壺（41）に類似例が認められる。この類例は、高坏では見出せないが、器台や壺では石川県柳田ウツノ遺跡溝A出土土器群に少量認められる。しかし、口縁部全体のつくりには相違が認められ、どちらかと言えば後出的なものと言えよう。器台は、大半が筒胴タイプと考えられる。48は若干の差が認められるが、石川県無量寺B遺跡溝状遺構出土土器群中の器台に類似する。

以上のように、内越遺跡の2遺構から出土した土器群は、塙崎II（古）式併行期を中心につつ、それよりも一段階新しい要素も含んだ土器群と言えそうである。また各遺構の土器群は、量的に少ないと概に言えないが、両者には長頸壺の有無等の組成や、形態に差異が認められる。これらが時期差として把握されるかは、検討を要するが、可能性としては小さくないものと思われる。

西岩野遺跡出土土器群の位置付け 柏崎平野における当該期の主要土器群について検討を加えてきたところであるが、その結果、刈羽大平遺跡では、古相、中相、新相に、内越遺跡では各遺構における差異が若干ながら認識され、西岩野遺跡でも、主体的土器群とSX-50出土土器群とが、古相と新相との関係にあると考えられる。

刈羽大平遺跡の古相は、西岩野遺跡の主体的土器群に近い関係にあって、時期的にはほぼ同段階の所産と考えられる。また西岩野遺跡SX-50出土土器群を中心とした一群は、刈羽大平遺跡の中相及び内越遺跡の古相と新相土器群の中でひとまず把握できる可能性が強い。以上のことから本地域における当該土器群は、概ね上述の2群にまとめられそうである。これらを、記述の都合上前者を第I群、後者を第II群土器と仮称しておきたい。

両土器群の相違は、第I群土器で主体を占める壺A、B類あるいは壺E類といった二重口縁形態が、第II群土器ではあまり用いられず、壺H類とした口唇部形態が、比較的多く認められることである。また文様的には、北陸地方東北部として位置付けされる本県地方は、元来擬凹線文は多く用いられないが、第I群土器では凹線文が少ないながら多用され、擬凹線文は一切認められないことである。また逆に第II群土器では、凹線文が施される場合が少なくなり、擬凹線文が若干ではあるが、比較的多く認められる。このことは、第I群土器から第II群土器へ時間的に変遷した場合、擬凹線文が第II群土器段階に導入あるいは伝播したと考えられる。全県的に資料に乏しい中では、確認することは困難を伴うが、少なくとも現状における柏崎平野以東では言えることではないだろうか。とすれば、第I群土器から第II群土器へのひとつの画期として意義付けされるだろう。なお、頸城地方では、柏崎平野よりも一段階は早くに擬凹線文の伝播があった可能性がある。

両土器群の他地域との併行関係について、詳述する紙数をなくしたが、北加賀編年に一応対比すれば、第I群土器は法仏I式期を中心とし、第II群土器は法仏II式期から月影I式期を若

千含んだ段階に概ね相当するものとしておきたい。なお、今後は遺構等の一括資料等の増加をまって再度確認したいと考えている。

（引用・参考文献）

- 石川考古学研究会編 1986 「シンポジウム『月影式』土器について（報告編・資料編）」
伊藤恒彦 1985 「小丸山遺跡石器類」『刈羽大平・小丸山』（柏崎市埋蔵文化財調査報告書第5） 柏崎市教育委員会
大森 勉 1986 「後生山遺跡」（糸魚川市埋蔵文化財報告第13号） 糸魚川市教育委員会
大場善雄・小出義治 1953 「千 種」（新潟県文化財報告書第一） 新潟県教育委員会
柏崎市史編さん委員会編 1982 「柏崎市史資料集 考古篇2」
柏崎市史編さん委員会編 1983 「柏崎市史資料集 地質編」
久々忠義 1982 「江上A遺跡」「北陸自動車道遺跡調査報告書——上市町土器・石器編——」 上市町教育委員会
久々忠義 1984 「弥生時代の時期区分」「北陸自動車道遺跡調査報告書——上市町木製品・絆括編（本文）——」 上市町教育委員会
駒井敏朗・岩崎 均 1986 「横山遺跡試掘調査概報」『長岡市立科学博物館研究報告』第21号 長岡市立科学博物館
駒形和愛・吉田章一郎 1962 「斐 太」 廉友社
坂井秀弥・山本 雄・横山勝栄 1983 「内越遺跡出土土器の越後における編年の位置」「国道116号線埋蔵文化財発掘調査報告書——内越遺跡——」 新潟県教育委員会
坂井秀弥 1985 「越後の弥生後期についての覚書」『新潟県史研究』17 新潟県
品田高志・伊藤恒彦 1985a 「吉井遺跡群」（柏崎市埋蔵文化財調査報告書第4） 柏崎市教育委員会
品田高志・伊藤恒彦・藤巻正信 1985b 「刈羽大平・小丸山」（柏崎市埋蔵文化財調査報告書第5） 柏崎市教育委員会
閑 雅之・岡本郁栄・宇佐美萬美 1980 「岩野遺跡」（柏崎市埋蔵文化財調査報告書第2） 柏崎市教育委員会
閑川尚功・石野博信 1976 「難 向」 横原考古学研究所
第18回埋蔵文化財研究会編 1986 「弥生時代後期から古墳時代のいわゆる山陰系土器について」
田嶋明人・越坂一也ほか 1986 「津町遺跡I」 石川県立埋蔵文化財センター
寺沢 薫 1980 「大和におけるいわゆる第5様式土器の細別と二、三の問題」「六条山遺跡」（奈良県文化財調査報告書第34集） 横原考古学研究所
土肥富士夫ほか 1984 「国分高井山遺跡」 七尾市教育委員会・国分高井山遺跡発掘調査委員会
中村學三郎 1974 「岩野遺跡検索調査略報告書」
浜野伸雄 1983 「弥生・古墳時代前期について」「鹿島町御前C遺跡調査報告書（IV）」 石川県立埋蔵文化財センター
機本澄夫 1966 「弥生文化の発展と地域性——北陸——」「日本の考古学」III 河出書房
西中通地誌研究会編 1974 「西中通のあゆみ」
正岡晚夫 1986 「四輪紋・擬凹線紋」「弥生文化の研究」3 雄山閣
宮本哲郎ほか 1983 「金沢市西念・南新保遺跡」（金沢市文化財紀要40） 金沢市・金沢市教育委員会
八幡一郎 1958 「刈羽貝塚」 北方文化博物館
谷内尾晋司 1983 「北加賀における古墳出現期の土器について」「北陸の考古学」 石川考古学研究会
谷内尾晋司ほか 1984 「鹿首モリガチ遺跡」（能登海浜道関係埋蔵文化財調査報告書II） 石川県立埋蔵文化財センター
湯尻修平・米沢義光 1986 「鹿島町御前C遺跡調査報告書（II・III）」石川県立埋蔵文化財センター
横山勝栄・大森 勉・岡本郁栄・折井 敦・木村宗文・坂井秀弥・高橋 勉・田海義正・山本 雄 1983 「国道116号線埋蔵文化財発掘調査報告書——内越遺跡——」（新潟県埋蔵文化財調査報告第33） 新潟県教育委員会

別表1 西岩野道路第III b層上面SX-50土坑状構造出土土器観察表

番号	器種	法量 (cm)	形	調整	施土	色調	地成	備考
1	甕(A類)	—	肩部上半成片のため、器形の詳細は不明。	肩部には筒状突起による斜突文が混在。内外面ともハケ調整がなされるが、内面にはナゲ状の痕跡により削除される。	約1%の砂粒を少量含む。 内面では露出。	黄褐色	ふつう	
2	甕A ₁ 類	口径17.2	二重口縁。颈部は丸みをもつた、外反するが、更にやや外傾した口縁が付く。肩部はゆるやかに弧形する。	2つの口縁接合部に位置する凹部が1条ある。周囲は口縁部内外ともハケナゲ。肩部以下部の内外面は、ともにハケ調整後平滑化されている。	粘着されてい る。	黄褐色	ふつう	E-3②Ⅲb層 (上部) E-3③Ⅲb層 口縁部外側に炭化物付着。
3	甕D ₁ 類	口径18.4	二重口縁。接合部で緩く立ち上がり、その部分が微隆起部になってしまっている。	口縁部横ナギ。颈部外表面は複数。内面は複数に走るハケ調整。	約3%、約1%の砂粒が多い。	黄褐色	ふつう	E-3②Ⅲb層 (上部) E-3③Ⅲb層 口縁部外側に炭化物付着。
4	甕D ₂ 類	口径16.6 高さ 8.8	口縁部は2段の横上げで、接合部外表面が突出し、二重口縁部を呈する。颈部のくびれや肩部の張りは強くなない。	口縁部から腹部外表面までナゲ。颈部は内面とハケ調整だが、内面はナゲ状の調整が施され、ハケ目直がほどこと認められない。	約1~0.5%の砂粒を多く含む。細面。	黄褐色	良好	口縁部外存
5	甕E類	口径17.0	口縁部は外反し、口部を上に向け、ややゆる無調子をする。	内外面横ナギ。外面上にハケ目状の痕跡が若干認められる。	粘着され。砂粒をほとんど含まない。	黄褐色	良好	口縁部外存
6	鉢E類	口径14.5 (器高) 2.1 高さ 7.8	二重口縁を呈し上部は外反し、口部が内反する。肩部は扁平で前部がやや張る。	全面ミカキ調整。朱彩。	約1%前後の砂粒をやや多く含む。	内面橙色 (肩部黒焼) 外面黄褐色	やや不良	口縁部外存
7	鉢E類	肩部 口径 16.2	扁平な肩部。器形はE-6に類似する可能性が強い。	外面上にガラス粘着部。内面は斜面上にハケ目直が残る。	粘着され斑剥。	黄褐色	良好	E-3③Ⅲb層
8	底部	底径 6.6	底面外縁は底2cm程の荷壓となっている。肩部には大きくひきり、底底部と考えられる。	外縁ハケ。内面は微弱によるナギ。	約1~2%の砂粒多。	明褐色	良好	

別表2 西岩野道路出土弥生土器観察表

番号	器種	出土位置	法量 (cm)	調整	施土	色調	地成	備考
10	甕A ₁	E-5② Ⅲb層上面	口径14.8	口縁部前面に凹面文が2ヶ所施される。口縁部は横ナギ。頂部以下は平面にされるが、外面上に若干のハケ目直がこのこ。	粘着されるが約1~2%の砂粒含む。	黄褐色	不良	口縁部外存
11	甕A ₂ 類	E-5② Ⅲb層	口径16.4	口縁部横ナギ。内外面に3条の凹面文が施される。内外面とも横ナギ。	約2%程の砂粒が多い。	褐色	不良	口縁部外存、外 面炭化物付着
12	甕B ₁ 類	E-4④ Ⅲc層	口径18.0	口縁部横ナギ。内面底部以下はへら削り。	約1~4%の大粒の砂粒を多く含む。	褐色	不良	
13	甕B ₂ 類	E-5⑦ Ⅲb層	口径21.1	口縁部と内面から腹部外表面まで横ナギ。	約1~2%の砂粒を多く含む。	黄褐色	不良	
14	甕B ₂ 類	E-4④ Ⅲc層	口径20.0	底部以上黒ナギ。内面底部以下はへら削り。	約1~2%の砂粒を多く含む。	灰褐色	ふつう	
15	甕B ₂ 類	E-5枝 Ⅲb層	口径14.3	口縁部内外とも横ナギ。	約1~2%の砂粒を多く含む。	黄褐色	不良	口縁部外存
16	甕B ₂ 類	E-4④ Ⅲc層	—					
17	甕B ₃ 類	E-5① Ⅲb層上面	口径14.0	口縁部横ナギ。頂上部は外表面がハケ。内面はミカキ表の調整である。	約1%程度の砂粒を含む。	褐色	やや不良	
18	甕B ₃ 類	E-5枝 Ⅲb層	—					
19	甕B ₄ 類	E-5枝 Ⅲc層	口径19.6	口縁部横ナギ。底部は平坦にされるが外面上にはハケ目直が若干残る。		にじい褐色	良好	
20	甕D ₂ 類	E-4⑦ Ⅲc層	口径13.0	口縁部側面には浅い凹面状源が2ヶ所施されている。口縁部は横ナギ。内面底部以下はハケ調整。	粘着されている。	黄褐色	良好	口縁部外存

番号	器種	出土地	底 層 (cm)	測 定 範 囲	加 土	色 調	地 質	備 考
21	縦E類	E-5② III b層	口徑12.2	口唇部から頭部外側まで横ナデ調整が施されるが、口縁内面はハケ調整のままである。	約1%程度の砂粒を多く含む。	褐色	良好	
22	縦E類	E-5③ III b層	口徑17.4	頭部～口唇部を横ナデ調整するが、頭部内外面にはハケ調整痕を不明瞭ながら残している。	約1%の砂粒及び場色粒子を少量ずつ含む。	粗褐色	良好	
23	縦E類	E-5④ III b層上面	—					
24	縦E類	E-5⑤ III b層	—					
25	縦B類	E-4② III c層	口徑24.4	口縁部横ナデ。頭部以下ハケ調整。	約2～3%の砂粒を多く含む。	褐色	不良	
26	縦G ₂ 類	E-5⑥ III 層	口徑19.0	口縁部側面に2条の凹面文が巡る。頭部～口縁全体は横ナデ調整。	約1～2%の砂粒を含む。	粗褐色	不良	
27	縦G ₂ 類	E-5 SK-58	—	口縁部側面に1条の凹面文が巡る。	約1～3%の砂粒を多く含む。	黄褐色	不良	
28	縦G ₂ 類	D-5② III b層	—	口縁部側面に1条の浅い凹面が巡る。				
29	縦G ₂ 類	E-5③ III b層	—	口縁部側面に1条の深い凹面が巡る。				
30	縦G ₂ 類	E-5 III c層	—	口縁部側面にやや明瞭な凹面文が巡る。				
31	縦F類	E-4② III c層	口徑10.6	口縁部内面とも横ナデ。	精選された砂粒をほとんど含まない。	内面：赤褐色 外面：黄褐色	良好	歯玉から腰以外の器種である可能性有り
32	縦G ₁ 類	E-5④ III c層	口徑17.3	口縁部内面とも横ナデ。	約1～2%の砂粒を含む。	褐色	不良	口縁部厚存
33	縦H ₁ 類	E-4 SK-60 P ₁	口徑16.0	口縁部内面から口唇部外側まで横ナデ。口縁部外側及び頭部内面はハケ調整。	約1～3%の砂粒を多く含む。	にじみ褐色	良好	口縁部厚存
34	縦H ₁ 類	E-4② III c層 C-3④ III c層	口徑19.2	口縁部横ナデ。頭部以下は内外面にハケ調整する。頭部内面のハケは細かくして浅く、板状に近い。	約1%程度の砂粒を含む。	褐色	良好	口縁部厚存 同一削合？ E-5⑥III b上面 E-4④III c
35	縦H ₁ 類	E-4② III c層	口徑23.4	磨滅して薄しく、横ナデは不明。口縁部外側や頭部以下内外面にはハケ痕が残された。全体として粗鈍である。	約1～3%の砂粒を多く含む。	粗褐色	不良	口縁部厚存
36	縦H ₂ 類	E-5瓶 III a層 D-5⑤ D-4②	口徑20.2 器高17.0 (現高 12.0)	口縁部から瓶下半に至るまでハケ調整が施される。口縁部内面には横ナデの痕跡も認められるが、ハケ調整後は未調整に近い。	約1～2%の砂粒を多く含む。	黄褐色～ 粗褐色	良好	口縁部～胴部 厚存
37	縦H ₂ 類	E-5瓶付近 III a層～瓶	口徑15.6	口縁部～頭部の全てがハケ調整され、横ナデは認められない。口縁部は粗鈍して不明。	約2%未満の砂粒を多く含む。	粗褐色	やや 不良	口縁部厚存
38	縦I類	E-4④ III b層	口徑 8.6	外側はハケ調整。口縁部及び内面は、平滑である。	約1%の砂粒を若干含むが、褐色～黄褐色の粘土粒(約1～3%)を多く含む。	外側の一部及び器壁内部褐色、芯は黒褐色	やや 不良	口縁部厚存
39	縦J類	E-5⑦ III b層	—					
40	縦G ₂ 類	E-5① III b層上面	口徑18.0 底径 6.0 器高27.0	口縫部横ナデ。外側は右斜傾か右傾。内面は底部附近で引き裂け状態を原則としたハケ調整。内面肩部には所々に横ナデ痕がある。	約1～2%の砂粒を多く含む。	にじみ褐色 底部、黒褐色 (黒腐?)	良好	全体厚存
41	縦	E-4⑤ III c層	制限最大 径 29.0	外側：瓶から右斜傾を原則とするハケ調整。 内面：上半は右斜傾の太くて浅いハケ調整。下半は、瓶底に近いハケ痕の調整。	約1～2%の砂粒多し。	外側：黄褐色 ～粗褐色 内面：赤褐色	やや 不良	外側には炭化物が多く付着。

番号	器種	出土地	法量 (cm)	調整	胎土	色調	施政	備考
42	底部	E-4 SK-60	底径 4.3	内外面ともハケ調整。	砂粒は若干だが、褐色 粘土粒を多く含む。	褐色	良好	
43	底部	E-5 ② III-a 層	底径 4.5	内面にハケ調整痕がわずかにの こる。	約 1~2% の砂粒を含 む。	赤褐色	やや 不良	
44	底部	E-4 ② III-a 層	底径 5.7	内面はヘラナギ状の調整を下か ら上方へ施している。外面は 裏位に近いハケ調整。	約 1~2% の砂粒を多 く含む。	赤褐色 内面灰褐色	ふつう	
45	底部	E-5 ① III-a 層+粘	底径 4.3	内外面のハケ調整。	比較的精緻され。砂粒 はない。	内面: 灰褐色 外面: 棕色	良好	
46	底部	E-5 ② III-a 層上部 SKP-23	底径 4.0		約 1~3% の砂粒を多 く含む。	赤褐色	やや 不良	
47	底部	E-5 ③ III-a 層	底径 3.6	内面はヘラ振り。外面はハケ調 整が施される。	約 1~3% の砂粒を多 く含む。	赤褐色	良好	
48	底部	E-4 ② III-a 層	底径 3.3	外側ハケ調整。	約 1~3% の砂粒を多 く含む。	赤褐色 黄褐色	不良	
49	腹側部	TP-1 III層	—	内面は細かいハケ調整。外面は ハケ調整後表面による剥離文 字が認められる。	約 1~2% の砂粒を含 む。	赤褐色	良好	外表面化物付着
50	腹C類	E-5 ② III-b ~ III-c 上層	口徑13.1	口縁部内外面は横ナギ。頭部内 外面はハケ調整が施される。口 縁部上段背面は、5条の凹凸文 字が認める。	焼成されているが、少 なく砂粒の砂粒が多い。	褐色	良好	
51	腹C類	TP-1 III層	口徑15.0	口縁部~頭部に横ナギが施され る。	約 2% 程度の砂粒を多 く含む。	赤褐色	不良	保存
52	腹B類	E-5 ② III-b 上層	口徑14.0	口縁部内面から頭部正面まで横 ナギが施される。	少の砂粒 (約 1%) を含む。	黄褐色	不良	保存
53	腹G類	E-5 ②, ③ III-b 層	口徑12.0	頭部内外面まで横ナギが施され る。頭部内面は細いヘアリ ングが施される。	比較的精緻されている が、約 2% 前後の砂粒 が若干認められる。	黄褐色	やや良	保存
54	腹G類	E-5 ② III-b 層	—					
55	腹A類	E-5 ② III-b 下層~ III-c 上層	口徑16.0	磨減が著しく、調整は不明であ る。	1% 程度の砂粒を多 く含む。	褐色	不良	口縁部保存
56	腹D類	E-5 ②, ③ III-b 上層~ III-c 上層 E-5 SX-50	口徑14.2	口縁部内外面は横ナギ後、軽く ミカゲ調整されるが、内面につ いてはやや不明である。頭部内面 は粗ミガキ、西面は細ミガキナ ギ調整が施される。	1% 前後の砂粒を比較 的多く含み、表面に落 出する。	黄褐色	良好	口縁部~胴上部 保存 未達り
57	腹(D類)	E-4 ② III-c 層	底径 3.8×3.5 軸高 8.6	外面は粗面以上を粗ミガキ。 下半分は細ミガキが施される。 内面は、粗面及び底部付近をハ ケ調整もしくはヘアリーナギによ るナギ調整を施し、中間は無ミガ キ半滑にされている。	焼成されているが多少 の砂粒が含まれる。	赤褐色	良好	胴下半分 保存 未達り 馬鹿あり
58	腹E類	E-5 ②, ③ III-b 上層~ III-c 層	胴部最大 径 12.2	外面は粗く若干粗糙さを感じさ せるミガキ調整が施され、やや 凹凸をもつ。頭部及び胴上 半部を細ミガキ、底部は粗ミ ガキ。下半分は粗ミガキが施され る。内面は丸洗状のナギが施さ れるが、半滑で粗糙感をや やとめる。	焼成され粗面な胎土で ある。	赤褐色	良好	胴部保存
59	腹	E-4 ②, ③ III-c 層	胴部最大 径 18.5	外面はハケ調整、内面もハケ調 整を施すが、中盤以下に裏位に 横ナギが施されている。	約 1% の砂粒を多く含 む。	黄褐色	良好	胴部保存
60	腹	E-4 ② III-c 層	胴部最大 径 20.3	内面とともハケ調整が施される が、内面の多くに上半分は粗でな く、輪縫痕を残している。	約 1~3% の砂粒を含 む。	褐色	不良	胴部保存
61	底部	E-4 ② III-b 層	底径 5.0	外表面とともハケ調整が施され る。内面は複数回にハケ先端部によ って整形する。	約 1~2% の砂粒を含 む。	赤褐色	不良	

番号	器種	出土地點	深さ (cm)	調査範囲	地土	色調	地成	備考
67	底部	E-3 ⑦ III b 層上面	底面 3.9	内外面ともハケ調整だが、外面は太くていたため、ミガ消失の効果がある。底部外層は、ヘラナナ調整が施される。	約 1% 前後の砂粒を少量含む。	内面：赤褐色 外面：暗褐色	不良	
68	底部	E-4 ⑦ III c 層	底面 5.7	内外面ハケ調整。	約 1~2% の砂粒を含む。	赤褐色	不良	
69	底部	E-4 ⑦ III c 層	底面 5.7	外表面は右斜傾のミガを調整。内面はハケ調整であるが、底部外層の直線をとどめるのみである。	精選されて微密で、砂粒は少ない。	明灰褐色	良好	
70	底部	E-5 ⑨ III b 層	底面 6.2	内面は荒れているため不平だが、外表面はハケ調整が施される。	約 1~2% の砂粒を含む。	赤褐色	不良	
71	高坪脚部 A 類	E-4 ⑧, ⑨, ⑩, II 類 E-5 ⑨, ⑩, ⑪ III a 層~III c 層	口徑 30.8, 深さ 5.0	内面及び右斜傾外層には丁寧な 複数ミガ、底部直線及び脚部外 層は複数ミガを施される。側内 面は直線によるナナ調整である。	精選され微密で、砂粒 は 11 とんど見当たらない。	にじみ黄褐色	良好	環状瓦 脚部瓦各 集まり
72	高坪脚部 A 類	E-5 ⑩ III b 層上面	直曲部径 11.0	直曲部外層のうち直曲部の上半 は複数ミガ、下半は複数ミガがな り、直曲部に側面による斜窓が 認められる。内面は無ナナ調整。	精選されて微密。	黄褐色	良好	朱塗り
73	高坪脚部 A 類	E-5 ⑩ III b 下層 ~III c 上層	直曲部径 13.4	直曲部から下方向はミガ、上方 は横ナナ調整が施される。内面 には複数ミガ及びハサツテによ る粗い縦調整がなされている。	約 1~3% の砂粒を少 量含むが精選されてい る。	黄褐色	良好	朱塗り
74	高坪脚部 B 類	E-4 ⑦ III c 層	—	外表面は傾位のミガを調整が施 されるが、あまり丁寧ではない。	約 1~2% の砂粒を多 く含む。	黄褐色	不良	朱塗り
75	器台脚部	E-4 ④ —	—	外表面はミガ、内面は横ナナ 調整が施される。	約 1% の砂粒を比較的 多く含む。	黄褐色	良好	朱塗り
76	高坪脚部 B 類	E-5 ② III b 層	厚部径 13.0	外層はミガを調整。直端部及び 内面は横ナナ調整が施される。	砂粒はほんと ど含まれ ず。精選されてい る。	橙色	不良	器台 朱塗り
77	高坪脚部 B 類	E-5 ② III b 層	—	穿孔は 4 本間。外表面は複数ミガ、 内面はハケ調整が施される。	約 1% 前後の砂粒を少 量含むのみで精選され ている。	黑色	良好	脚部瓦
78	高坪脚部 C 類	E-5 ③ III b 層	直曲部径 10.2	外表面は複数ミガ、内面は横ナナ 調整である。	精選され、砂粒をほん ど含まない。	淡褐色	良好	瓦
79	器台脚部	D-4 ③ III c 層	—	外表面は複数ミガ、内面は上半が ほとんど無調整。下半は横ナナ 調整が施される。	約 1% 前後の砂粒を含 む。	黄褐色	不良	脚部上半は定期 修理
80	把手付	E-1 ④ III b 層上面	—	把手部外層に複数ミガ。把 手下は右斜傾のハケ調整痕が 残存し、この他は複数ミガが丁 寧に施される。内面には横ナナ 調整が施され、若干の横ナナ痕が認 められる。	約 1% 細溝の砂粒を少 量含む。	黄褐色	良好	
81	鉢 A 類	E-4 ⑤ III c 層	口徑 20.8	口斜部前面に 4 条の直端文が施 かれており、横ナナ調整がな されている。	約 1% 前後の砂粒を少 量含むが精選されてい る。	黄褐色	良好	口斜部瓦
82	鉢 A 類	E-4 ②, ③, ④, ⑤, ⑥ III c 層	口徑 22.0	内外面にわざって丁寧な複数ミ ガを調整が施される。直端部に は 4 条の直端文が施す。	約 1% 細溝の砂粒を含む が、精選され微密。	黄褐色	良好	口斜部瓦
83	鉢 C 類	E-4 ④, ⑤ III a 層~III c 層	口徑 17.8	口斜部から直端部外層には複 数ミガが施され、その他の丁寧なミ ガを調整が施される。	精選で砂粒をほとんど 含まない。	にじみ細色	良好	
84	底部	E-5 ⑨ III b 層	底面 4.2	内外面ともミガを調整が施され る。	約 1% の砂粒を少量含 む。	内面：暗褐色 外面：黑褐色	ふつう	



1. 岩野遺跡・西岩野遺跡遠景

北から



2. 西岩野遺跡近景

南から



1. 西岩野遺跡（調査前）



2. 西岩野遺跡表砂除去



1. SD-57大溝の発掘



2. 中世溝群の発掘



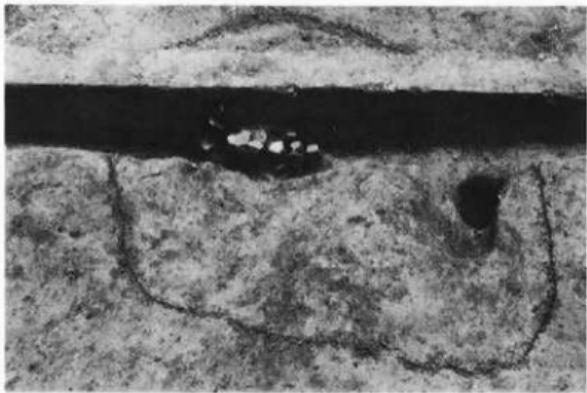
3. SX-2堅穴状遺構の発掘



弥生時代後期の遺構



1. SK-3土坑



2. SX-50土坑状遺構



3. SI-60-P₁柱穴



1. 調査区西壁



2. SD-57, C断面



3. SD-57, D断面

SD-57 大溝覆土土層断面



1. SD-57 大溝土層断面（調査区東壁）



2. SD-57 大溝全景

南から



1. 造構群全景

西から



2. 造構群全景

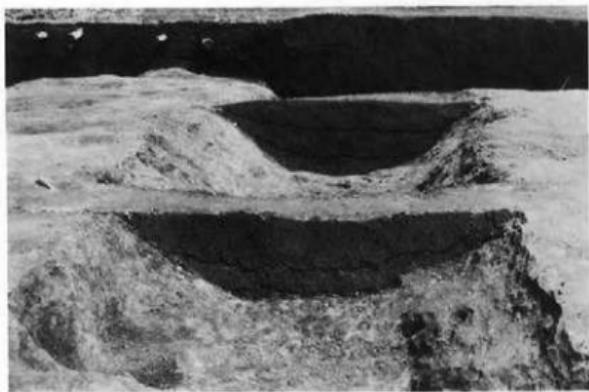
北西から



1. SD-53溝



2. SD-52溝



2. SD-52溝断面



1. SD-54溝



2. SD-55溝西端



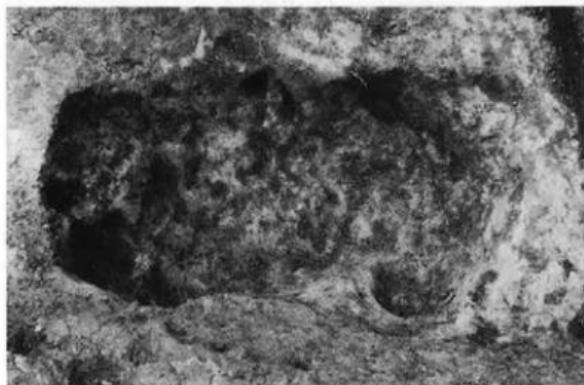
3. SD-55溝中央



1. 土壌群



2. SK-51 土壌



2. SK-56 土壌



1. 近世の遺構群全景

南西から



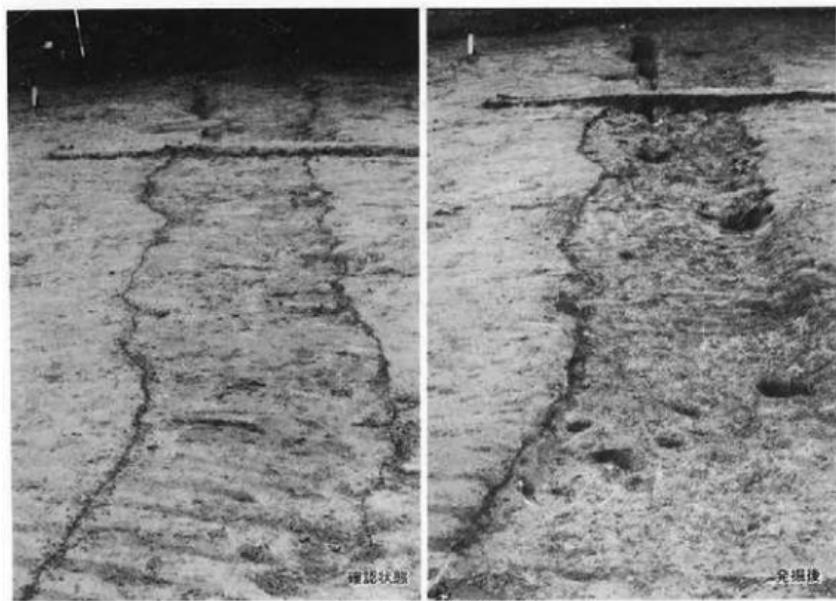
2. SB-I 建物址

東から

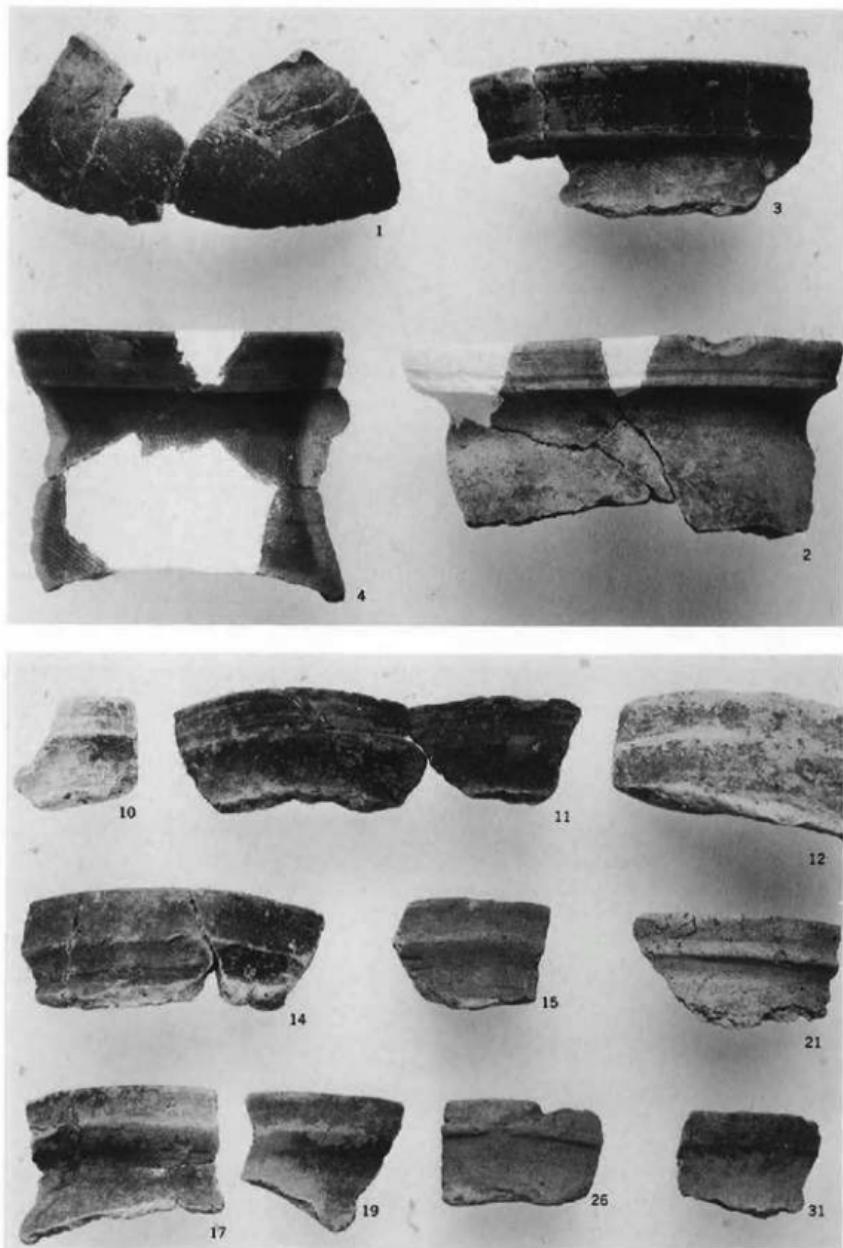


1. SX-2 穴状遺構

南から

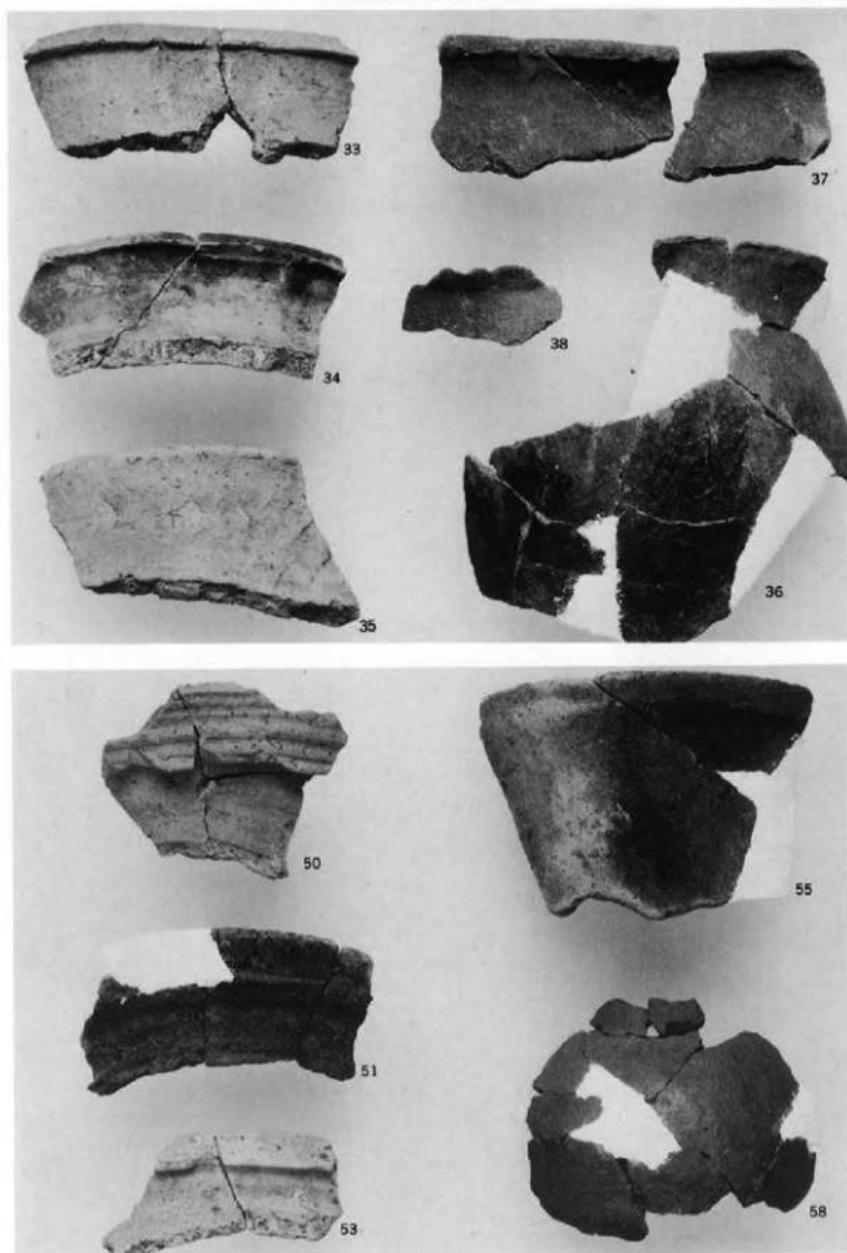


2. SR-62 道路状遺構



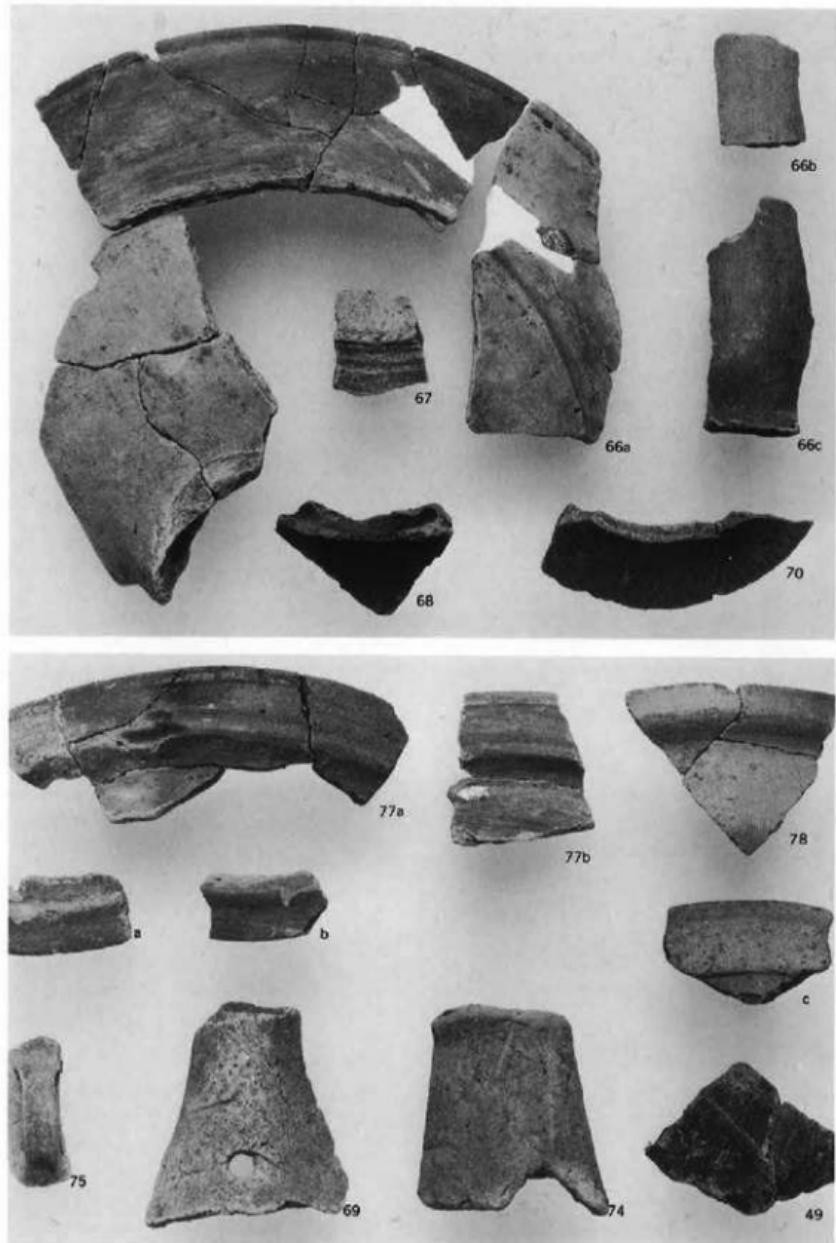
弥生土器

(約1:2)



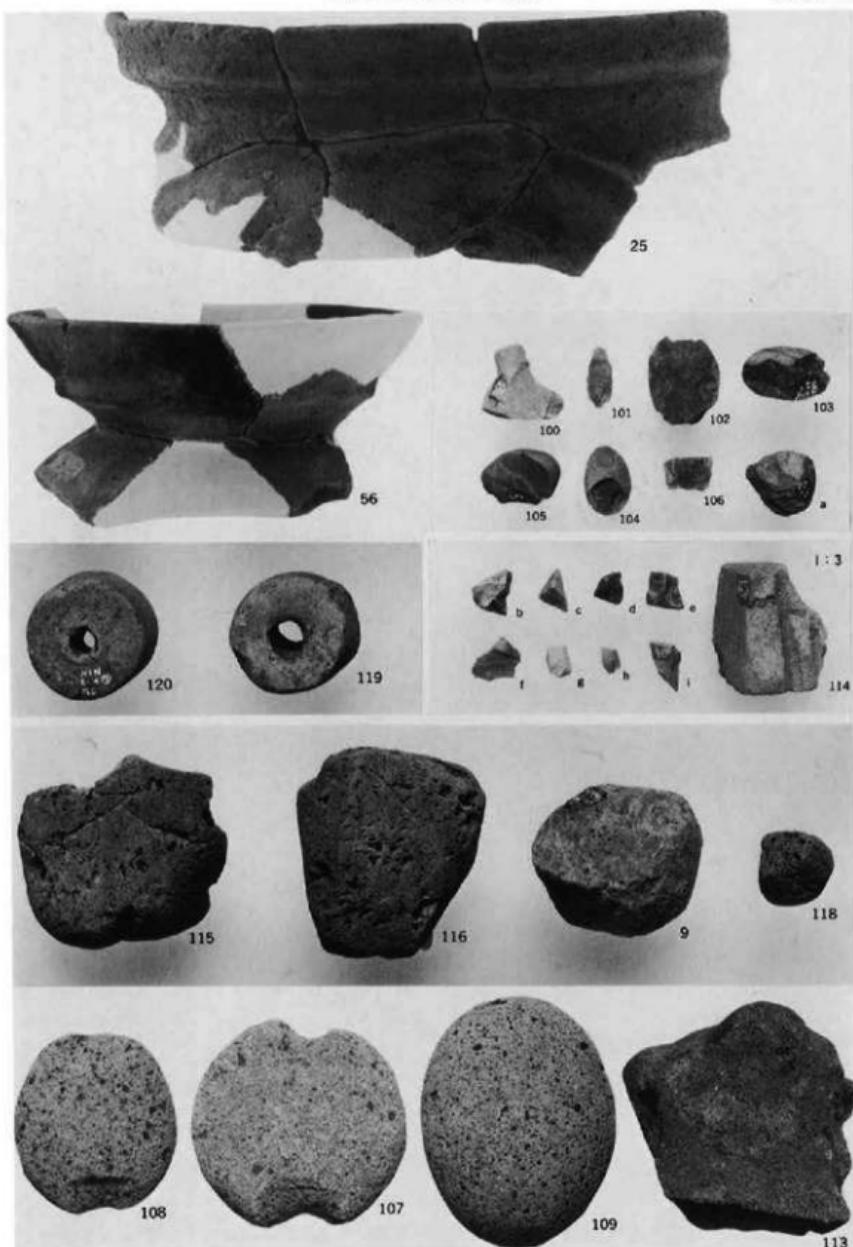
弥生土器

(約1:2)



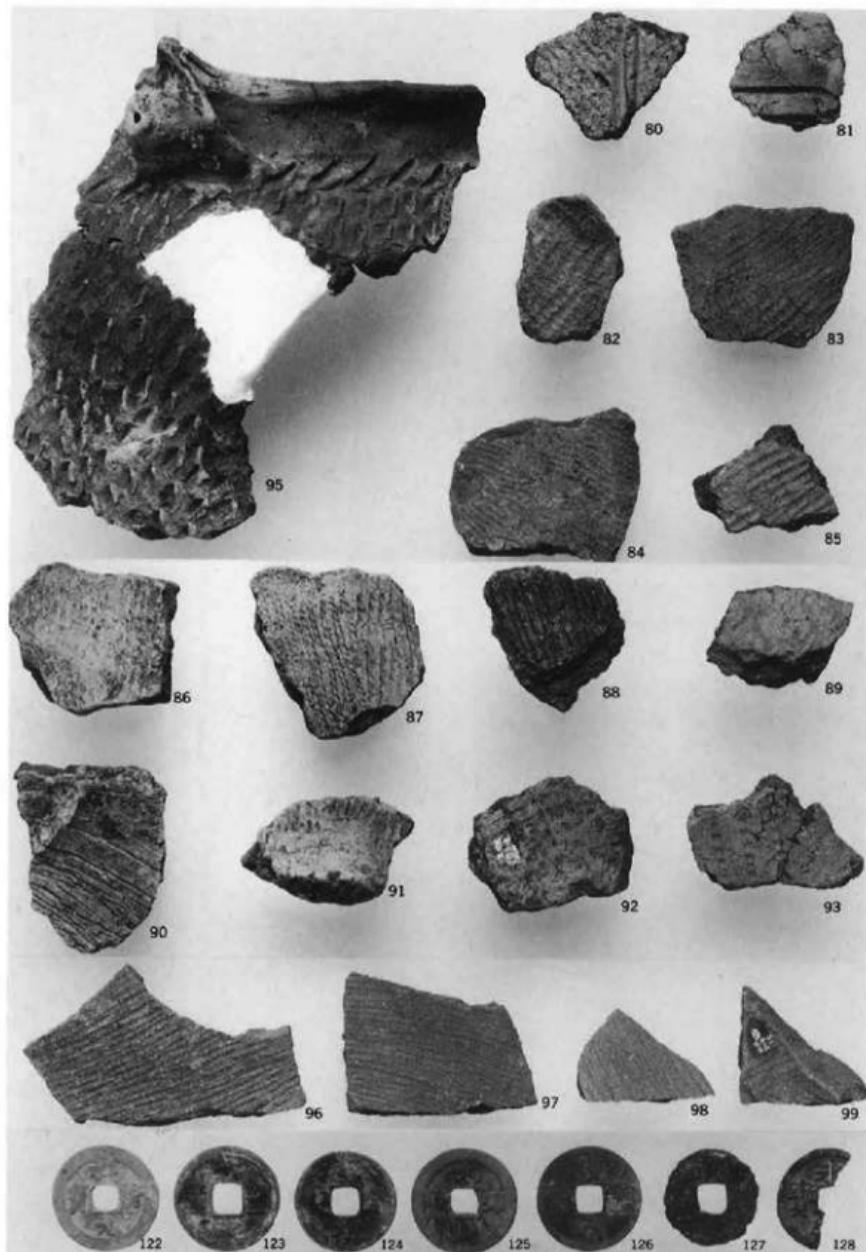
弥生土器

(約1:2)



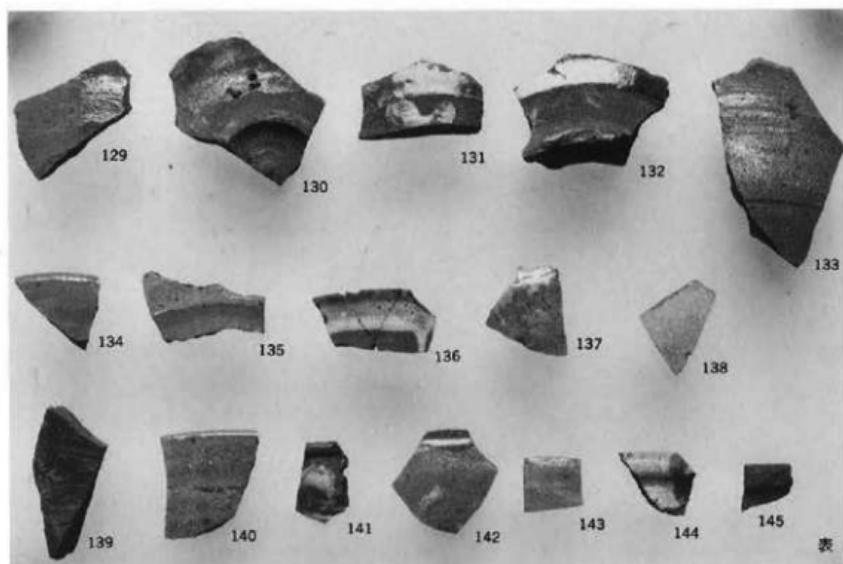
弥生土器、土製品、石器

(100~114は約1:3、他は約1:2)

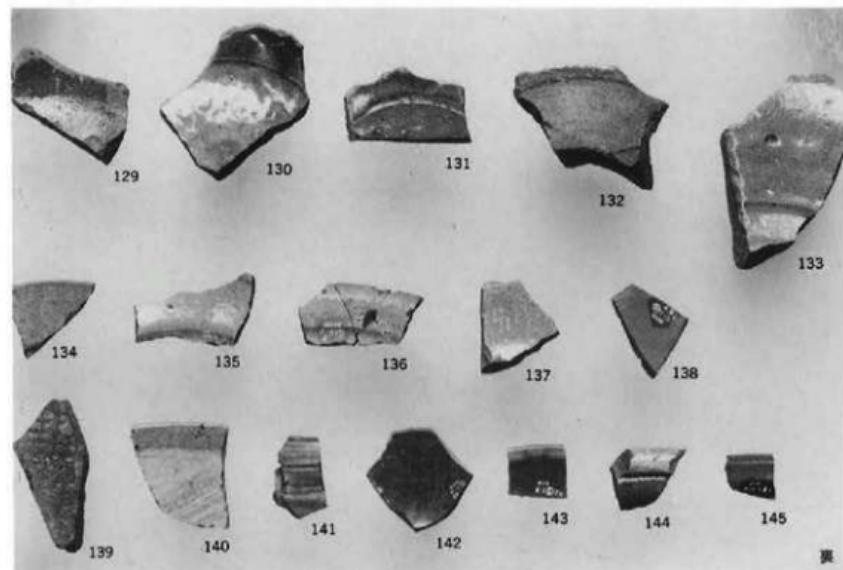


縄文土器、珠洲系陶器、古銭

(約1:2)



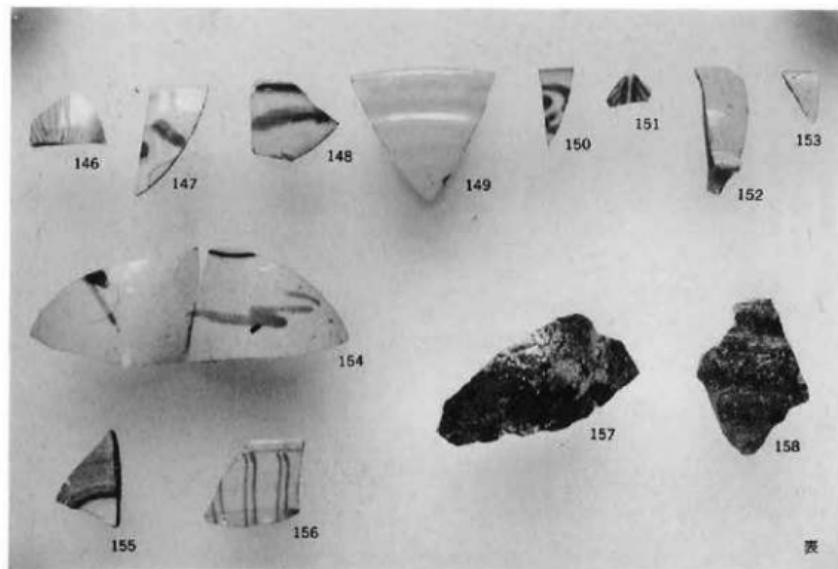
表



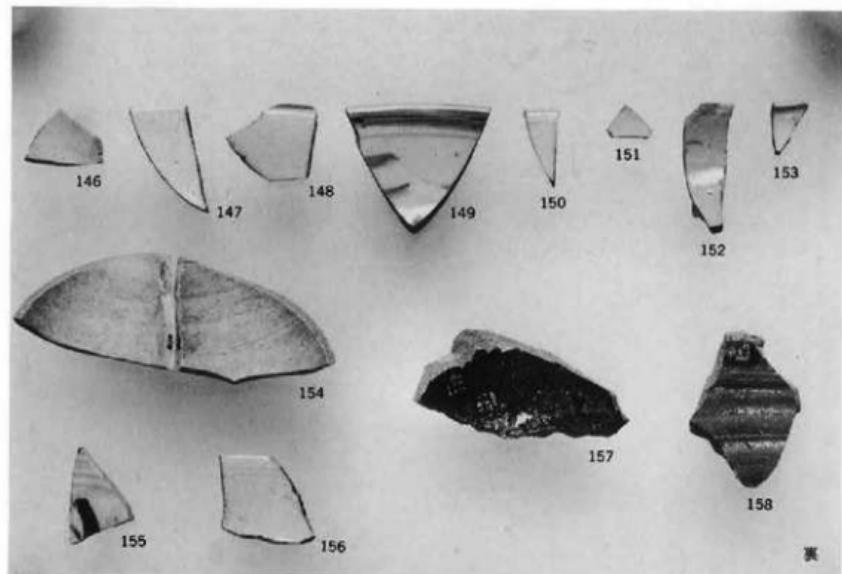
表

陶磁器(唐津)

(約1:2)



表



裏

陶磁器（伊万里・越中瀬戸）

(約 1:2)

柏崎市埋蔵文化財調査報告書第7

西 岩 野

—新潟県柏崎市長崎西岩野遺跡発掘調査報告—

昭和62年3月25日 印刷

昭和62年3月31日 発行

発行 柏崎市教育委員会

印刷 三秀社

『西岩野』(柏崎市埋蔵文化財調査報告書第7) 正誤表

頁	行	誤	正
序	19	県土木部管理課	県土木部監理課
例言	16	駒形敏郎	駒形敏朗
例言	18	新潟県土木部管理課	新潟県土木部監理課
6	22	後葉に	中葉に
6	32	低地性の遺跡を	低地性の遺跡と
9	表	34. 杉ノ木田B遺跡	34. 杉ノ木田A遺跡
10	8	幅は約150m程	幅は約150m程
26	19	ピットか溝状遺構	ピットや溝状遺構
36	27	67は、有段部に	68は、有段部に
36	28	68には	67には
38	13	貼付隆線に	貼付隆線と
38	35	器類は、皿、…	器種は、皿、…
39	2	142~142は、	142~143は、
40	10	ビエス・エスキューが	ビエス・エスキュー等が
44	17	研究は、	の研究は、
50	15	駒井敏朗	駒形敏朗
50	17	駒形和愛	駒井和愛